APRIL 29, 1922. NO. 8071

The Japanese American News

大正一一年四月廿九日（土）第千八百七十一號

Published and distributed under Permit (No. 173) authorized by the Act of October 6, 1917, on file at the Post Office of San Francisco, California. By order of the President: A. S. Burleson, Postmaster General.

日米

THE JAPANESE AMERICAN
PUBLISHED DAILY AT
690 ELLIS STREET,
SAN FRANCISCO, CALIFORNIA.
PHONE PROSPECT 228
ENTERED AS S. F. POST OFFICE AS SECOND CLASS MATTER.
K. ABIKO, EDITOR & PROP.
SUBSCRIPTION RATES IN ADVANCE
DAILY.....ONE YEAR..... $11.00
DAILY.....SIX MONTHS..... 6.00
DAILY.....ONE MONTH..... 1.00
SINGLE COPIES..... 5 CENTS
BRANCHES
DENVER, FRESNO, LOS ANGELES, NEW YORK, OAKLAND, ODEN, PORTLAND, SACRAMENTO, STOCKTON, SAN JOSE, SALT LAKE, SEATTLE, VACAVILLE, WATSONVILLE

日米

歐州と米國

ゼノア會議の到着すべき道

歐洲改造を眼目とするゼノア會議は今尚は露國問題を中心として停頓して居る。聯合國側では露國の回答が餘りに圖々しいと業を煮やし、露國側では聯合國の遣り方が不親切だと恐痴を云ふ。此調子では却々協定がつきさうにも無い。併し吾人が度々云つた通り此會議は決して終極的のものではない。つまり歐洲改造と云ふ空前の大事業に露國と獨逸とを參加せしめる道が開ると云はねばならぬ。何となれば歐洲改造は實に世界的の大事業であつて、是れには歐洲各國許りでなく米國も日本も充分の援助を爲さねばならぬのであるから、現在のゼノア會議に代表された列國の力だけでは如何ともする事が出來ないのである。

英國首相ロイド・ジョーヂは歐洲改造に對し米國が有する特殊の地位に關し緩々陳述する所があつた。彼れは云ふ。米國は歐洲の政局に對して何等復雜せる因緣を有しない。從つて彼れの國に對して顧慮する必要なく、極めて自由に公平なる判斷を下すことが出來ると。要するにジョーヂとしては歐洲諸國が互に右顧左眄動もすれば首鼠兩端の態度を持せねばならぬ情態にあるに對し、米國が遠慮のない自由な判斷を下して貰ひたいのであらう。誠に無理のない希望である。つまり米國の所謂自由な判定と云ふものが果して公平でもあるか否かは頗る疑問だ。第一に米國が歐洲改造に對して實際上どの程度まで自由な地位に居るかが疑はしい。成る程是れまで米國はモンロー主義を固執し、歐洲の政局に無關心の態度を採つて來て居ることは事實である。又歐洲各國が互に抱いて居るやうな人種的若くは歴史的反感好感も持つて居まい。併し乍ら大戰以來米國と歐洲各國とは切り離すことの出來ぬ經濟關係に依つて結ばれて居る。而して米國の資本階級は歐洲改造を機會に其勢力範圍を舊世界に伸ばさうと密かに企畫して居る。此點を考へると米國が歐洲改造なる問題に對し果してどの程度まで公平であるか疑容易に明言することが出來ないのである。更に資本階級と云ふ利己的な階級を離れて一般米國人の判斷に至つては從來の歴史に徴して甚だ頼もしい所がある。而して其理由の大半は彼等が米國以外の事情に疎いて甚しく無智であることに歸せねばならぬ。一般の米國人が海外の事情を知らぬ爲めに驚くべき獨りよがりの概括論を勝手に作成して世界の有識者を苦しめた實例は決して乏しくない。最近彼等が理が非でも支那を援けやうと盲滅方に突貫云つた通り此會議は決して終極的のものではない。つまり歐洲改造と云ふ空前の大事業を爲さねばならぬのであるから、現在のゼノア會議に代表された列國の力だけでは如何ともする事が出來ないのである。

英國首相ロイド・ジョーヂは歐洲改造に對し米國が有する特殊の地位に關し緩々陳述する所があつた。彼れは云ふ。米國は歐洲の政局に對して何等復雜せる因緣を有しない。從つて彼れの國に對して顧慮する必要なく、極めて自由に公平なる判斷を下すことが出來ると。要するにジョーヂとしては歐洲諸國が互に右顧左眄動もすれば首鼠兩端の態度を持せねばならぬ情態にあるに對し、米國が遠慮のない自由な判斷を下して貰ひたいのであらう。誠に無理のない希望である。つまり乍ら米國の所謂自由な判定と云ふものが果して公平でもあるか否かは頗る疑問だ。第一に米國が歐洲改造に對して實際上どの程度まで自由な地位に居るかが疑はしい。成る程是れまで米國はモンロー主義を固執し、歐洲の政局に無關心の態度を採つて來て居ることは事實である。又歐洲各國が互に抱いて居るやうな人種的若くは歴史的反感好感も持つて居まい。併し乍ら大戰以來米國と歐洲各國とは切り離すことの出來ぬ經濟關係に依つて結ばれて居る。而して米國の資本階級は歐洲改造を機會に其勢力範圍を舊世界に伸ばさうと密かに企畫して居る。此點を考へると米國が歐洲改造なる問題に對し果してどの程度まで公平であるか疑容易に明言することが出來ないのである。更に資本階級と云ふ利己的な階級を離れて一般米國人の判斷に至つては從來の歴史に徴して甚だ頼もしい所がある。而して其理由の大半は彼等が米國以外の事情に疎いて甚しく無智であることに歸せねばならぬ。一般の米國人が海外の事情を知らぬ爲めに驚くべき獨りよがりの概括論を勝手に作成して世界の有識者を苦しめた實例は決して乏しくない。最近彼等が理が非でも支那を援けやうと盲滅方に突貫して爲すべきだけのことはする事を考へて見ても、所謂米國の公正なる判斷なるものが餘程眉毛に唾を附けて見なければならぬことが判るであらう。併し乍ら米國の金を當にしなければ到底成就することの出來ないのが歐洲改造と云ふ事業であることは最早や疑を容れぬ。此點はロイド・ヂョーヂのみならず歐洲の政治家が悉く一致して居る所であつて、ゼノア會議が果して其準備であることは彼等が暗黙に自覺して居る所である。

ロイド・ヂョーヂは云ふ。此會議に米國が參加しない以上は奈何あつても我々だけで話を極めねばならぬと。此陳述は歐洲と竟其準備であることは彼等が暗黙に自覺して居る所である。

ロイド・ヂョーヂは云ふ。此會議に米國が參加しない以上は奈何あつても我々だけで話を極めねばならぬと。此陳述は歐洲と云つた通り此會議は決して終極的のものではない。つまり歐洲改造と云ふ空前の大事業である。此調子では却々協定がつきさうにも無い。併し吾人が度々云つた通り此會議は決して終極的のものではない。つまり歐洲改造と云ふ空前の大事業である。而して其理由の大半は彼等が米國以外の事情に疎いて甚しく無智であることに歸せねばならぬ。一般の米國人が海外の事情を知らぬ爲めに驚くべき獨りよがりの概括論を勝手に作成して世界の有識者を苦しめた實例は決して乏しくない。最近彼等が理が非でも支那を援けやうと盲滅方に突貫して爲すべきだけのことはする事を考へて見ても、所謂米國の公正なる判斷なるものが餘程眉毛に唾を附けて見なければならぬことが判るであらう。併し乍ら米國の金を當にしなければ到底成就することの出來ないのが歐洲改造と云ふ事業であることは最早や疑を容れぬ。此點はロイド・ヂョーヂのみならず歐洲の政治家が悉く一致して居る所であつて、ゼノア會議が果して其準備であることは彼等が暗黙に自覺して居る所である。

ロイド・ヂョーヂは云ふ。此會議に米國が參加しない以上は奈何あつても我々だけで話を極めねばならぬと。此陳述は歐洲と竟其準備であることは彼等が暗黙に自覺して居る所である。

本社東京特電（四月廿八日午後三時着）

●海軍の人員大淘汰

▽將校の免官一千名

華盛頓軍縮會議に於て締結されたる海軍制限協約の結果免官されたる將校は約一千名あり二年兵役の海兵五萬五千人中一万二千名は除隊歸郷を命ぜられたり

●淺野造船所閉鎖多數失業

淺野造船所は軍役會議の結果愈事業を中止する事となり事務員職工合計一千八百名を解傭したり

●大原重明伯貴族院より入る

▽白蓮事件で辭任の柳原伯後任

柳原義光伯が令妹白蓮女史問題の責を負ひ辭職し欠る爲欠員となれる貴族院議員の後任として廿八日大原重明伯選擧されたり

●素封家本間光輝氏死去す

極東關係電報（四月廿八日聯合通信）

山形縣酒田の素封家本間光輝氏は廿七日死去せり

●齊多對日開戰布告

▽日露中立地帶侵入を理由

廿七日齊多よりの特報に依れば赤露軍新司令官センシエフ將軍は日本軍が中立地帶に侵入しイマン方面に進軍の結果東露共和國と日本とは交戰狀態に入りたる旨布告せられたりと

▲第八師團續々浦鹽に出動

浦塩よりの情報に依れば「メンチヤンメンクワ」附近に於て露兵の小衝突あり赤軍は戰死三十二名を出し砲二門を失ひたり又日本軍第八師團歩兵五十八聯隊及び三十一聯隊は廿七日青森發浦鹽に向ひたるが交代軍殘部は五月一日及び同四日出發の筈なり（東京發）

●沿海州に軍艦派遣

▽邦人漁業權保護の爲

日本政府は西伯利沿海州に於ける日本人漁業權保護の爲め軍艦を派遣すべき旨廿八日外務省より公表されたり右は東露共和國政府が四月四日以來ポーツマウス條約に依り與へられたる權利を承認する事を拒絶せるが爲めなりと（東京發）

●大總統總理の哀願

▽三將軍に徹兵を勸告

中華民國大總統徐世昌氏並に署理國務總理周自齊氏は目下大軍を擁して北京附近に對峙しつゝある張作霖、吳佩孚、曹琨三將軍と通電を發し直ちに部下軍隊を率ゐて任所に歸り內亂を惹起さゞる樣切望したり周自齊氏は之と同時に各省督軍省長に打電し國際飲局に於ける支那の地位の頗る憂慮に堪ゆざるものあるを痛論し切に國家の爲め內亂防止の爲め努力せん事を求たりと

▲北京城中流言蜚語盛行す

目下北京市中は張吳兩軍の戰端開始に關する流言蜚語を以て充たされ居り北京上海間の交通は全く杜絶し天津よりの列車は必ず掠奪嚇ざの起るべきを豫期し捨て賣を始めた商人より數年來稀に見る安値にて骨董品や錦繍等を買込み續々日本に向て送れり尚は各方面の情報を綜合するに兩軍の衝突は到底避け難きも尚は一週間は無事なるべし（北京發）

歐洲新情勢電報（四月廿八日聯合通信）

●英國飛行家の壯擧

▽五月下旬發程二ヶ月の豫定

英國飛行家の世界一周計畫は飛行家サー・ロッス・スミス氏慘死の爲め一時頓挫の姿なりしが今回英國陸軍飛行少佐ジレーク氏スミス氏の遺志を繼承しマクミラン大尉と同乘該壯擧を決行する事となりたり夕刊スター紙は報せる尚は其の旅程は佛蘭西伊太利、希臘、埃及、メソポタミヤ、印度、東部支那、日本よりアラスカ列島を經てアラスカに渡り米大陸橫斷紐育に至り其れよりニューファウンドランドに飛び太西洋を越わゞグリーンランド、アイス・ランド經由蘇格蘭に歸着の豫定にて五月下旬出發二ヶ月にて完成の計畫なりと（倫敦發）

●露國全權辯明努む

聯合諸國が露國の回答に對し更に遺牒すべく準備しつゝあるに際し露國全權は廿七日公開狀を發して同國の態度を辯明すると同時に列國が其對露政策を秘密裡に協定し露國に對し更に協定經過の內容を示さゞるを遺憾とせり露國委員の陳述に曰くカーン會議協定の精神に對し眞に忠實なるものは露國のみ露國は既に經濟的改造の根柢たる互惠主義を最も忠實に主張するものなりと（ゼノア發）

●愛蘭兩派首領の唯み合ひ

廿七日開會の愛蘭シン・フエーン團ダイル・アイレアン會議に於て同會議々長グリフイス氏と共和派首領デヴアレラ氏との間に大激論あり愛蘭を二つに分つて現在の混亂狀態に陥れたる責任の歸する處に關し互に猛烈なる人身攻擊を爲し合り（ダブリン）

●佛國政府漸く諒解

▽全權團との意志疏通す

佛蘭西首席全權パルトウ氏を始めゼノアに於ける佛國委員が露國に關し次第に寛大の見解を有し來れるに對し巴里に於ける佛國政府當局は依然强硬主義を主張せる爲め兩者の意志疏通を缺き重大なる危機を惹起せんとする懼れありしが廿七日夜パルトウ氏と首相ポアンカレー氏との間に長距離電話を以て充分なる意見の交換行はれたる爲め兩者の對露政策は漸く調和を見るに至れり（ゼノア發）

華盛頓電報（四月廿八日聯合通信）

●ハイチ撤退と勸告

▽米國憲法の精神に反す

ウイスコンシン州選出上院議員ラフオレツト氏の內務省攻擊に於て內務省が最近ワイオミング州クイボットドーム海軍油田を代表者は廿八日國務郷ヒューズ氏に對しハイチ國民に自治を許し同駐屯の米國軍を直ちに撤退されたる旨希望せる請願書を提出せり同請願書の主意は合衆國が米國憲法の精神に悖り條約並に國際法に違反すといふに在りと

●油田リース問題擴發さる

▽ラフオレツト氏の內務省攻擊

ウイスコンシン州選出上院議員ラフオレツト氏は廿八日の議場に於て內務省が最近ワイオミング州クイボットドーム海軍油田の賃貸にリース問題に關する勞農政府代表者が露國民全體に屬する巨萬の財產を特別關係の實業團に許與せるは不都合なりと攻擊し政府は右に關する事實並びに關係書類を公表せざる可からずとの決議案を提出せり（華府發）

●賠償問題討議乎

佛國首相ロイド・ヂョーヂ氏は露國セヘヅに到着せる勞農政府代表者の出迎の爲め來れる勞農政府代表者の出迎を受けたり一行は露國セヘヅに滯在の後西伯利に出發鑛山、製鐵農業等に從事すべしと（セヘヅ發）

●比律賓獨立運動

比律賓獨立運動委員は來る四月三十日マニラ灣の濱船キストン號にて渡米に決定せり一行は西伯利移住隊の一部は二十八日カルカッタ囚徒三百人脫獄を企て死者六名を出せり（倫敦發）

●印度囚人の騷擾

●華府會議の貢獻

米國國際法協會に於て演說せるエリユールート氏は華府會議の成功を分析し是れ單に世界平和促進の上に大成功を收めたるのみならず國際法に絶大の權威を與へたりと（華府發）

●坑夫騷擾と州兵

ユタ州代理知事のクラッケット氏はカーボン郡の炭坑騷擾地に對し必要起らざる限り州兵を派遣せざる旨を發表したるが同地方炭坑警手と能業工夫とは二十七日衝突して三名の負傷者を出したり（ソートレーキ發）

●露人入國を禁止

佛國外務省は過般露國舞踏家アルガ・スペシヴアが從來過激派に加はり居たりとの理由の下に其入國を禁止せるが今回此政策は一層擴大され著述家其他にも適用さるゝことゝなれり（巴里）

●佛前大統領長逝

病氣危篤を傳へられる佛國前大統領デシヤネル氏は二十八日午後遂に死去したり（巴里發）

佛國第十代目の大統領として領に選擧され同年二月十八日就任したるが幾何もなく病の爲め辭任したり同氏は永く上院議長の要職に在り著述家として亦雄辯家として知らるゝ

●一枚一億留紙幣

露國留紙幣は全然無價値同樣の樣となり之が爲め露國內の食料品は益々騰貴する一方なるが露國政府は最近更に不換紙幣を續發する計畫あり其額面は一枚にて五千萬ルーブル一億ルーブルといふ額のものにて恐らく古今未曾有の紙幣ならんと傳へらる（モスコウ發）

●佛國前長逝

佛國前長逝は病氣の爲め遂に死去したり（巴里發）

●愛蘭兩派首領の唯み合ひ

廿七日開會の愛蘭シン・フエーン團ダイル・アイレアン會議に於て同會議々長グリフイス氏と共和派首領デヴアレラ氏との間に大激論あり愛蘭を二つに分つて現在の混亂狀態に陥れたる責任の歸する處に關し互に猛烈なる人身攻擊を爲し合り（ダブリン）

●佛國政府漸く諒解

▽全權團との意志疏通す

佛蘭西首席全權パルトウ氏を始めゼノアに於ける佛國委員が露國に關し次第に寛大の見解を有し來れるに對し巴里に於ける佛國政府當局は依然强硬主義を主張せる爲め兩者の意志疏通を缺き重大なる危機を惹起せんとする懼れありしが廿七日夜パルトウ氏と首相ポアンカレー氏との間に長距離電話を以て充分なる意見の交換行はれたる爲め兩者の對露政策は漸く調和を見るに至れり（ゼノア發）

華盛頓電報（四月廿八日聯合通信）

●ハイチ撤退と勸告

▽米國憲法の精神に反す

ウイスコンシン州選出上院議員ラフオレツト氏の內務省攻擊に於て內務省が最近ワイオミング州クイボットドーム海軍油田の賃貸にリース問題に關する勞農政府代表者が露國民全體に屬する巨萬の財產を特別關係の實業團に許與せるは不都合なりと攻擊し政府は右に關する事實並びに關係書類を公表せざる可からずとの決議案を提出せり（華府發）

●油田リース問題擴發さる

▽ラフオレツト氏の內務省攻擊

ウイスコンシン州選出上院議員ラフオレツト氏は廿八日の議場に於て內務省が最近ワイオミング州クイボットドーム海軍油田の賃貸にリース問題に關する勞農政府代表者が露國民全體に屬する巨萬の財產を特別關係の實業團に許與せるは不都合なりと攻擊し政府は右に關する事實並びに關係書類を公表せざる可からずとの決議案を提出せり（華府發）

●比律賓獨立運動

比律賓獨立運動委員は來る四月三十日マニラ灣の濱船キストン號にて渡米に決定せり一行は

●印度囚人の騷擾

カルカッタ囚徒三百人脫獄を企て死者六名を出せり（倫敦發）

●露國全權辯明努む

聯合諸國が露國の回答に對し更に遺牒すべく準備しつゝあるに際し露國全權は廿七日公開狀を發して同國の態度を辯明すると同時に列國が其對露政策を秘密裡に協定し露國に對し更に協定經過の內容を示さゞるを遺憾とせり露國委員の陳述に曰くカーン會議協定の精神に對し眞に忠實なるものは露國のみ露國は既に經濟的改造の根柢たる互惠主義を最も忠實に主張するものなりと（ゼノア發）

●英國飛行家の壯擧

▽五月下旬發程二ヶ月の豫定

英國飛行家の世界一周計畫は飛行家サー・ロッス・スミス氏慘死の爲め一時頓挫の姿なりしが今回英國陸軍飛行少佐ジレーク氏スミス氏の遺志を繼承しマクミラン大尉と同乘該壯擧を決行する事となりたり夕刊スター紙は報せる尚は其の旅程は佛蘭西伊太利、希臘、埃及、メソポタミヤ、印度、東部支那、日本よりアラスカ列島を經てアラスカに渡り米大陸橫斷紐育に至り其れよりニューファウンドランドに飛び太西洋を越わゞグリーンランド、アイス・ランド經由蘇格蘭に歸着の豫定にて五月下旬出發二ヶ月にて完成の計畫なりと（倫敦發）

●露國全權辯明努む

聯合諸國が露國の回答に對し更に遺牒すべく準備しつゝあるに際し露國全權は廿七日公開狀を發して同國の態度を辯明すると同時に列國が其對露政策を秘密裡に協定し露國に對し更に協定經過の內容を示さゞるを遺憾とせり露國委員の陳述に曰くカーン會議協定の精神に對し眞に忠實なるものは露國のみ露國は既に經濟的改造の根柢たる互惠主義を最も忠實に主張するものなりと（ゼノア發）

●愛蘭兩派首領の唯み合ひ

廿七日開會の愛蘭シン・フエーン團ダイル・アイレアン會議に於て同會議々長グリフイス氏と共和派首領デヴアレラ氏との間に大激論あり愛蘭を二つに分つて現在の混亂狀態に陥れたる責任の歸する處に關し互に猛烈なる人身攻擊を爲し合り（ダブリン）

●佛國政府漸く諒解

▽全權團との意志疏通す

佛蘭西首席全權パルトウ氏を始めゼノアに於ける佛國委員が露國に關し次第に寛大の見解を有し來れるに對し巴里に於ける佛國政府當局は依然强硬主義を主張せる爲め兩者の意志疏通を缺き重大なる危機を惹起せんとする懼れありしが廿七日夜パルトウ氏と首相ポアンカレー氏との間に長距離電話を以て充分なる意見の交換行はれたる爲め兩者の對露政策は漸く調和を見るに至れり（ゼノア發）

華盛頓電報（四月廿八日聯合通信）

●ハイチ撤退と勸告

▽米國憲法の精神に反す

ウイスコンシン州選出上院議員ラフオレツト氏の內務省攻擊に於て內務省が最近ワイオミング州クイボットドーム海軍油田の賃貸にリース問題に關する勞農政府代表者が露國民全體に屬する巨萬の財產を特別關係の實業團に許與せるは不都合なりと攻擊し政府は右に關する事實並びに關係書類を公表せざる可からずとの決議案を提出せり（華府發）

●油田リース問題擴發さる

▽ラフオレツト氏の內務省攻擊

ウイスコンシン州選出上院議員ラフオレツト氏は廿八日の議場に於て內務省が最近ワイオミング州クイボットドーム海軍油田の賃貸にリース問題に關する勞農政府代表者が露國民全體に屬する巨萬の財產を特別關係の實業團に許與せるは不都合なりと攻擊し政府は右に關する事實並びに關係書類を公表せざる可からずとの決議案を提出せり（華府發）

●比律賓獨立運動

比律賓獨立運動委員は來る四月三十日マニラ灣の濱船キストン號にて渡米に決定せり一行は

●印度囚人の騷擾

カルカッタ囚徒三百人脫獄を企て死者六名を出せり（倫敦發）

●露國全權辯明努む

聯合諸國が露國の回答に對し更に遺牒すべく準備しつゝあるに際し露國全權は廿七日公開狀を發して同國の態度を辯明すると同時に列國が其對露政策を秘密裡に協定し露國に對し更に協定經過の內容を示さゞるを遺憾とせり露國委員の陳述に曰くカーン會議協定の精神に對し眞に忠實なるものは露國のみ露國は既に經濟的改造の根柢たる互惠主義を最も忠實に主張するものなりと（ゼノア發）

●英國飛行家の壯擧

▽五月下旬發程二ヶ月の豫定

英國飛行家の世界一周計畫は飛行家サー・ロッス・スミス氏慘死の爲め一時頓挫の姿なりしが今回英國陸軍飛行少佐ジレーク氏スミス氏の遺志を繼承しマクミラン大尉と同乘該壯擧を決行する事となりたり夕刊スター紙は報せる尚は其の旅程は佛蘭西伊太利、希臘、埃及、メソポタミヤ、印度、東部支那、日本よりアラスカ列島を經てアラスカに渡り米大陸橫斷紐育に至り其れよりニューファウンドランドに飛び太西洋を越わゞグリーンランド、アイス・ランド經由蘇格蘭に歸着の豫定にて五月下旬出發二ヶ月にて完成の計畫なりと（倫敦發）

◆歴史湮滅の嘆（廿三）

＝廿年代田舍の生活

無錢旅行者の事ども＝ 尺魔

◎明治二十年代には桑港日本人家持中にカーペットを敷いてゐる家は三軒しか無かつた。正金銀行出張所長の社宅、領事官邸、黑澤ドクターこれだけであつた。此生活狀態は明治三十年頃まで續いた。

◎フロアにカーペットが無い代りにスピンゴも無かつた。唾をフロアの上に吐いて靴で踏み散らすから世話が無い。此筆法で生活した連中が稀れにカーペットの敷いてある家に訪問すると平生の習慣が此處にも應用される。唾をカーペットの上に吐いて靴でコスつて置く、煙草の吸殼は散らばる、實に野蠻極る無作法であつた。

◎田舍の方に行くと、一層生活は實に簡單

◆故國消費組合の現情と實際の利益

家庭購買組合理事長 藤田逸男氏談

私共の經營してゐる消費組合は、最初帝大の關係者、女子大學の教授たちと共に創立したものであるが、段々事業の內容が知れ渡るにつれて組合員も殖ゑ今日では既に一千五百人の加入者を見、資本金も

◇四萬餘圓に 達してゐる出資額は一口に付き三十圓、これが拂込みは入會の際十圓、爾後一ヶ年に五圓宛コツマリ四ヶ年に全部拂込むやうな仕組になつてゐる、最初の一年半といふものは殆ど缺損つゞきで非常に心配したが、この頃は漸く剩餘を示すやうになつた、かういふ組合を經營して見ると、社會の人心がはつきりと眼に映つて來て如何にも團結心に乏しい事、つまり多くの人々が社會的意識をもつてゐない事に驚かされる、勿論現在の

◇購買組合と いふものが市井の小賣商ほど便宜に働いてゐないと感じもしようが、組合員が現在組合に加入してゐながらこれを利用する事を知らないなんて實に情ない次第である、元來消費組合といふものは組合員が多ければ多いだけ其消費物品を安く得られる筈で、從に組合は各家庭を基礎とする故に組合は各家庭の組合である、そして互に平等の出資をしてゐるのであるから組合は一つの營利會社でもなければまた

◇商店でもな い、從つて組合員は資本主でもなければ得意樣でもない、萬人平等の家庭の組合である、それ故消費組合といふものは「買つた、買つた」「儲けた、儲けられた」といふ間柄でなくて「共同の生產所」また「仕入の場所である」同時に「共同の倉庫」である、だから

◇家庭生活に 必要な物品は何でも組合から求むべきである、勿論配達人の不注意、不都合等は彼等の一身上の幸福を思ふと同時にこれを監督すべき權利を有してゐるのであるから不滿な點は誰でも自由に申出る事が出來るのである、不滿を歷止し得ても、また商人は贅澤品を先にしてクンヨを儲けようとする、組合主義は生活に必要品を先きにし、贅澤品を後にする結果、子女の教育上、また廣く社會人心の上に好影響を與へる、また組合を利用すれば各自の家庭生活の豫算を正しく實行する事ができる、尙は組合にたいしては

◇人ごと人ごとが 營利をねらひにして共同の益のために專ら考へるのであるからそこに始めて人間の本然性たる愛による扶助の途に用ひ、一部はこれを

◇配當して行 ひまるのである、それから商人は營利を目的とするが組合はこれを根本的に廢止する結果、利潤が加はらぬ故其の物品は實費にまで低下する、組合は常に統計的基礎の上に立つ故、仕入も過剩にせず、また生產も必要量だけする故に經濟的恐慌がない、商人は投機によつて貨物の流通を圖り

◇不正の儲け をするが組合は必要だけの貨物を常に用意し必要に應じて生活資料を配分するから投機の機關は一切これ

◉故國政界の雲行

德川內閣は以ての外（下）

憲政會內閣とも云へぬ理由

此上政友會に國民は望まぬ

相との經緯が生じたのだから今後の居据りが此派に對してドウ飛が着くかは眞の興味ある問題だ尤も此派は政權をドウやらこれ云ふのでないから或る程度迄仕未が好いだらうがそれでも對研究策は當局に取つての難題なチヂレンマと云はざるを得ない之を如何に收拾するかは全く見物だらうと云つて今の處他に乘取りに有力者がある譯ではなし華府會議以來德川內閣は誰が云ふとなく絕望の今日貴族院內閣は到底物になりそうもなく然らば何故憲政會へと言はないのかと不思議だといふもの十分理由はある一體現在の政黨は政友でも憲政でも其出所進退に於て殆ど何等の相違を見ない云はゞ政權爭奪の爲めに足場に過ぎない殊に

▲近來の憲政會は 頗る拙だ標榜する普選案でも之を政爭の具に供したるより外見わるい現に國民中の一部ではアノ普選案が通つたら政黨の改選は出來やうが果して政治が改善されるかどうか疑はしい現に地方自治制度の改正が癈した結果に見て明かであるといふやうなことが自ら其前途を暗からしむる有力なる原因となつて居るもこの政友會が此儘無局を枉がりもうつて切扱けて却つて一家一票主義と云ふやうな折衷的普選案でも切扱けて却つて一家一票主義にも切扱けて却つて一家一票主義と云ふやうな折衷的普選案で

▲文相が代れば 自ら昇格して人材缺乏の現に人材缺乏の研究會では勅選過が目下の權威である前議會には十名を逸して更に今議會に山川男を失つた又過激法案と引カランで內閣は責任を免れ得ても、また內閣は責任を免れ得ても、また內閣は責任を免れ得ても、また

◆ハガキ一枚で得れる壹百弗の懸賞金

……人氣加って來た一般讀者の投票數豫想の競爭

豫定の如く今廿九日午後一時に第三回副賞投票の第二期投票を開票する、何れが第一位を占むるかは明日の紙上に

▼發表する　永築である、こゝで同時に注意を要すべきことは第三期締切は來る一日正午であるから此日を忘れないやう肝に銘ずることである、各團體ともに今や猛烈な運動に入つて益々戰最中である

× × ×

公共團體投票に鑑みて餘興的に開始した一般讀者の投票數豫想競爭は大人氣で開始して間もなく續々來る、其回答を見ると最低百五十万票から最高

▼三百万　票其間を往來しつゝあるが中には四百万票と云ふ突飛な豫想もあり、併し各團體に潜勢力の養成に努め愈々最後に意外の巨彈が飛び出すかも知れぬとの豫想から來て居るかも知れぬ、或は此豫想が的中して此豫想者がハガキ一枚で百弗の賞金を獲得する譯である、所で

▼回答者　に注意したいのは別項の規定を熟讀の上投書されたいことである、回答を見るに規定に違反のもの多數々見受ける例へばハガキ以外に認めたもの、回答者の住所姓名を忘れたものなどあつたが之れ等は皆無効である

◇ポイント競爭規定左の如し◇

地方別

		名稱	投票數
羅府	南加	熊野愛友會	七三九一六三
桑港		佛教會學園	五二四八七三
須市	基督	教青年會	四八五六六七
	ガデナ平原	青年會	四〇九七〇八
羅府	桑港	寺佛教會	三三六一五八
桑港		幼稚園	二三七七八四六五
		ハンホード學園	二二二二二二二八
		ハンホード學園	一九一一三七
		ブラサ青年會	一九〇〇三四
		救世軍本營	一〇九四〇一四
		バレヤ學園	一八五九一六
		ウインスロー青年會	二七二七七
		小兒院	一〇九四〇一
		南加小兒院	三五七七三
		育兒會	三五四九
		王府學園	七一七八
		王府學園	一八二一四
		羅府第一學園	七〇四〇
		金門學園	六三六〇
		ソノマ郡青年會	一三五六三五
		ハイスクール倶樂部	一三五六三五
		旭運動倶樂部	一二三六九
		聖公會幼稚園	八九八九
		常磐學園	八九四二
		櫻井學園	六九四二
		日本獨立教會	六〇八〇
		常磐學園	六〇三〇
		聖教會	六〇三

空翔る人

北尾亀男

【其百卅三】

和島は失望のどん底に陥つた。滿一年の間を暗い冷たい獄舍の中で寂寥の檻に閉ゐられると何よりも先きにまづ女の處へ走つて行つた心は、そこで期待をつかも裏切られて、温かい抱擁や、優しい微笑の代りに、苦い冷たい情なさを感じさせられた彼にとつて菊彌は既に路傍の女であつた。そこにはもう温かい抱擁も優しい微笑もなかつた。彼は變り方の早くて烈しい女心を果敢なるを感じながら默つて諦めやうとした。そして今度は節子の方に押へ難い心を向けて、今日わざ〳〵船橋まで訪ねて來て見れば、意外にも節子は出家して最早この土地にゐないと云ふことを聽いて、今度は意氣沮喪して了つて、久しぶりに生き甲斐のあるやうな、何となく胸の躍つてゐた、來た時の氣持とは全く正反對の深い失望の穴に投込まれてゐた。そして再び東京へ歸つて來ると、淺草で日の暮るゝのを待つて、暗くなつてから其處を出て、山の手方面に行く電車に乘つた。

丁度うの時刻に一方の菊彌は晩の飯を濟ましてお湯に出かけて行つた。いつもは大抵明るいうちに行くのだけれど、今日は朝から何となく頭が重くて一日愚圖々々して了つて、

『お湯にでも入ると、さつぱりするから行つてたいで』

と、母親に勧められて、澁々出かけて見たのである。そして小半時程經つて、湯から上つたが、頭は矢張り重くて氣分は少しも變らなかつた。然しこゝ四五日妻を見せないから若しや留守中拙宅へ來てゐやしないかと思つて、化粧だけはいつものやうに丁寧にしておいた。

で、戸外へ出て家の方へ歸りかけたが、ふと氣がついて、お茶菓子を買ひに明るい通りの方へ歩いて行つた。そして菓子屋の近處まで行くと、そこでばつたり和嶋に出會つて了つた。菊彌は何と云ふ譯もなく頭から水何處で飲んだのかひどく酒氣を帶びてゐて、いつになく眼付が險しく血走つてゐた。

『私、今、お湯の歸りだから早く歸らないと家で心配するわ』

『そんな極り文句はよせよ。面白くもねゝね』

『何か用があるのなら早く云つて頂戴、急いでゐるんだから』

『何か用だつて？　おい〳〵、ふざけちやいけねゝね、何處を押しやうんな音が出るんだい』

と、和島は濁臭い息をふうつと吐いて、菊彌の顔を睨みつけた。

和嶋はあとからついて來たが

◇厄年の話（一）

心身の上に來る變化

愛兒まで手放す愚かな迷信

また厄年の方は一個年を通じて五官の働きを良く調和して行つた方が厄を逃れる一つの方便になります、例へば

◇常に耳を使ふ

◇電話交換手はつゝめて自宅に歸つてから人と談話するとか、悲しい劇の場面を見て涙を流した後で喜劇を觀て笑つて歸るなどして細心注意をしたく、例へば父母とか其人の兄姉が曾て幾年か前に厄年をあつた時水死したとか、

◇兇器に倒れ

たとか或は燒死したとか大なる危難に遭遇して、悲しい物語を幼心に聽かされて居た人が、己が其の厄年に廻つて來た時に、自分も乾度此の年は滿足ではあるまい悲しい運命がつき纏つてゐるのだらうと煩悩したりするが如きは大禁物で自らこれを

◇未然に防ぐ

心持が肝要です、男子の四十九歳の厄に罹つて此の世を去つた過去の人では兎角剛腕で記憶力の強い素質の人で後の上杉謙信、織田信長とか支那公使であつた山座圓次郎の如き、どちらかと云へば豪傑肌め人が倒れてゐます、又三十三歳の厄年の女は比較的子の無い婦人即ち

◇不姓娠女が

たま〳〵三十三歳の厄年に遭遇して子を生み、其の生れた兒が女の兒であれば其の女兒がまた三十三歳になるを忌むべき厄年に罹つて悲しい運命を見るだらうなど〻取越苦勞をして大概里子に遣つて仕舞ふ習慣があります、これとても厄年を餘りに迷信的に考へたもので學ぶべきではありません、又男の兒が生れたのを見て、其の

◇厄年の母親

が非常に喜んで「此の兒は出世しますよ」

「この兒は全く神樣から授かつて下さつた兒です」等と人に物語るが如きは誠に芳ばしからぬ話で、厄年の三十三歳の或る婦人が愛兒をもつた一人生んで奉んでゐるのに、其の主人が頑冥で厄年絶對不可抗力と稱して妻◇無慘に里子

に遣つた等と云ふ話が幾らも世にあります、のは實に悲しむべき事です

（つゞく）

鮮魚、精肉
和洋食料理賞一番
桑港魚市場
電話フヰルモア四二九四

櫻庭療院
電氣按摩呂鍼術完備
電話フヰルモア五七七三

婦人帽子
特別勉強
ローズ帽子店

貸金
質屋
桑港公認醫師會
桑港公認歯科醫師會
桑港櫻府電氣鐵道
San Francisco-Sacramento R.R.
桑港櫻府
桑港公認歯科醫
井戸本保之助
日本病院
北河醫院
十全醫院
伊津野醫院
帝國病院
藤森直和
福田洋洲
喜安都定
橋田慶通
藤田慶次郎
田中敏太郎
小川榮一
林秀樹
山本辰雄
藤田省三
木暮篤太郎
槍垣益一
川口藤子
家木英子
村山なみえ
劉日初
眞鍋産院
小田運送店
北米藥舗
藤井旅館
高尾鶴松
日本ドラグストア
NIPPON DRUG CO.
1699 Post St., San Francisco.
藥局
大阪藥店
無料進呈
牛田幸八
美術裸體寫眞
Oriental Art Studio
紐育寫眞帖
同繪端書
飯屋新開業
林産院
中山産院
公認産婆林イエ
上田産院
うすずみ
六
すき焼
博多屋
岩田美術店
T. Iwata Art Store
256 E. First St., Los Angeles, Calif.
日米新聞社
650-654 Ellis Street, San Francisco.
第二回副賞投票始る
投票締切日
現金五千弗提供
公共團體援助投票
本週の標語
「怠る勿れ」
自分の關係ある團體の爲に自分の好きな團體の爲に
「怠る勿れ」
◁五千弗の内譯▷
一等 金二千弗
二等 金一千弗
三等 金七百弗
四等 金三百弗
五等 金二百五十弗
六等 金二百弗
七等 金百七十五弗
八等 金百五十弗
九等 金百二十五弗
十等 金百弗
肥料造人
有効確實
日本人一手販賣
小林商會
H. Kobayashi
1449 Buchanan St., San Francisco, Cal.

◆老巧の亞軍を迎へる 新鋭の佐市野球團

今夜は相携へて出桑

本日午後佐市に於ける快試合

今日は午後二時から佐市日本人試合振り如何は明日の對櫻府試運動場に於て佐市對亞市の決戰合に一層の が行はれる成績の上から云へば一敗者同志の試合である佐市朝日野球團が辛越した技量の所有者であることは前回布市に於ける

▼肉迫戰 に充分に認められ又亞市チームも大きなスコアで櫻府日本倶樂部に敗れたが老練なチームとして他から怖れられて居る兩者の決處は蓋し明日の三大ゲームの結果を豫想せしむる上に於て絶大の興味を有するものである就中佐市チームのらるゝ守備の堅實さを示すであらうし佐軍側では充實せる內外打が興味の中心となつて居る此試合終了後兩チームは相携へて桑港に 乘り込ん 赴主催のレセプションに臨む手筈になつて居る

▼熱狂を 加ふる所以となるべく全加州の好球家は非常な期待を玆に存して居る亞軍では例によつて老巧の宮崎が水も洩さぬ守備の堅實さを示すであらうし佐軍側では充實せる內外打が興味の中心となつて居る此試合終了後兩チームは相携へて桑港に 乘り込ん 赴主催のレセプションに臨む手筈になつて居るもの である就中佐市チームの

◆推薦された××××

二人の名審判者は

適材を得たファンの欣び

ウエロー、スウイニーの兩氏

明日ユーイング、フキードルでドに集まる數千の觀衆が此上も行はる本社主催加州同胞野球大會は本社主催加州同胞野球大會が願くば圓滿に公平に且つ愉快に終了せしめたいと云ふ希望は本社が最初より高調した所であつて此希望は

▼全加州 數萬のファンが夢しく抱く處であると信じるが故に主催者として本社は目下最善の力を此爲めに盡して居る第一に本社の最も喜びとする所は當日の三大ゲームの審判者としてミクシヨン・リーグ會長ニーロン氏の推選に依りボビー・ヴエロー、モリス・スウイニーの兩氏を得たことで

▼兩審判 者の經驗と技能とは既に充分の定評がある、ヴエロー氏は球審を專門としスウニー氏は塁審の專門家で兩氏共に長くミツシヨン・リーグの正審判員たると同時にコーストリーグの補助審判として聲名あり ニーロン會長が幾多の審判者中より特に右兩氏を

▼推薦さ れたことは深く信じる所あつてのことゝ思ふ斯くの如き名審判者を得たことは當に我社の喜びたるに止まらず參加チームの滿足する所であり且つ當日ユーイング・フイール

◆今廿九日(午後二時より) 佐市日本人運動場

佐軍—亞軍

◆明廿日(午前十時より) 桑港ユーイング・ヂールド

佐軍—櫻軍

◆同 日 (午後一時より) 同上運動場

亞軍—布軍(第一回)

櫻軍—布軍(第二回)

優勝試合番組

◆美事な銀杯と

優勝旗陳列

昨日は五車堂

本日は大成堂

本社主催の加州同胞野球大會の優勝チームに授與する榮ある優勝旗と優勝盃は昨日五車堂の店頭に飾られた藍地に浮き出る樣な月桂冠を現した他しい程美事な優勝旗は非常な人氣を呼んで同店の前は忽ち人山を築き押すな〳〵の盛況を呈した本日は此優勝旗並に優勝盃を青木大成堂の店頭に陳列し一般の觀覽に供する事とした

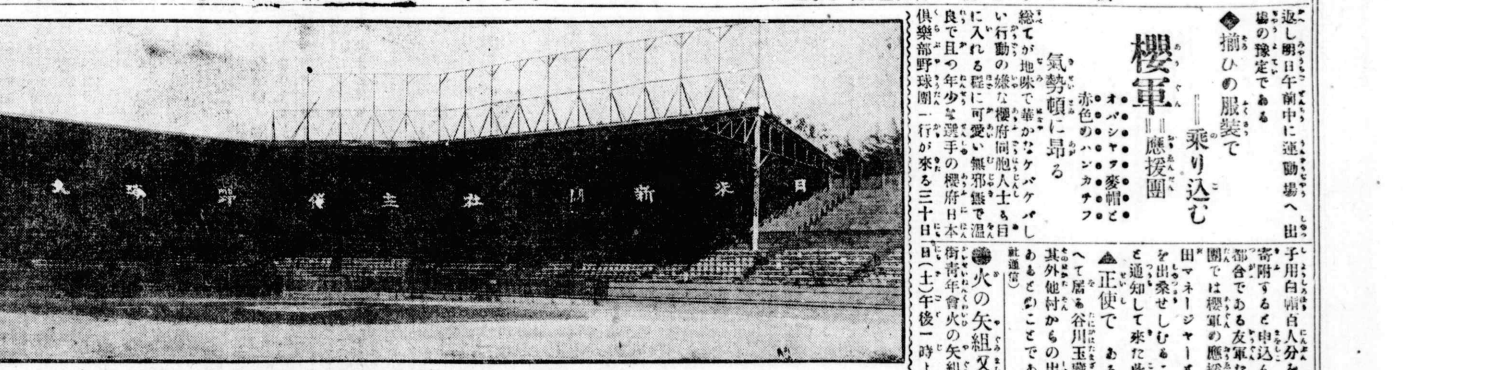
◆今日乘込む

地方軍

今夜勢揃ひの

招待會を催し

愈々優勝大試合は明日と迫り參加の各軍は今日續々桑港へ乘り込で來る、櫻府軍は本日午前十一時五十分フエリー着の電車で乘込みポスト街一六五一の安藝ホテルに投じ布市軍は午後六時十分フエリー着ポスト街一七三四のミカド・ホテルに投じ佐市で戰づて終戰と同時に來桑し午後七時からサター街青年會で催される本社主催招待會に出席し此處で四大地方を代表する各選手の勢揃を行ひ佐軍はサウスパークの瓢箪屋に投宿し亞軍は本夜レセプションが終ると引



返し明日午前中に運動場へ出場の豫定である

◆揃ひの服裝で

櫻軍

乘り込む

應援團

オーバシヤツ麥帽と赤色のハンカチフ

氣勢頓に昂る

總てが地味で華かなケバケバしい行動の總なく櫻府同胞人士も目に入れる程に可愛い無邪氣で溫良で且つ年少な選手の櫻府日本街青年會火の矢組野球部は廿九日(土)午後一時より第十一街と

▲桑港で 催される晴れの野球爭覇戰に乘込む期日も追つて十一時五十分フエリー着の電車で乘込みポスト街一六五一の安藝ホテルに投じ布市軍は午後六時十分フエリー着ポスト街一七三四のミカド・ホテルに投じ佐市軍は午後七時から桑港へ乘込む筈である、櫻府軍は本日午前

▲百人分の 赤色ハンカチーフを寄贈するから希望者は來店請求されたしとのこと又當市の不充分にて放免され六日前に出

子用白帽白人分を應援出桑者に寄附すると申込んで來たのは好都合である友軍たる不老林野球團では櫻軍の應援代表として池田マネージャーと永井正之助氏を出桑せしむることを決議したと通知して來た此の人達は

▲正使で あるがバタクに控へて居る谷川玉藏氏出桑の豫定上町の飲食店及び雜貨店をも大分引ク掛けたりである

◆火の矢組又戰ふ サター組運動

一萬圓

引揚に費した

門司沖の坐礁詳報

東瀛の安洋丸が十二日午前四門海峡埋之浦沖で坐礁した事件は當時本社東京特電で報じた如くであるが其引揚は非常な困難を極めたる事が

▼近便着 の日本新聞に記載されて居る其詳報を見ると安洋丸は埋之浦に差蒐つた時大音響と共に淺瀬に坐礁したので當時船客は四百七十八名荷物五千七百七十八噸を積載し居り船體の前半は海底泥土深く突込みランチ甲飯夫が死力を盡しての引卸も効を奏せず磐石の如く動かず時に決行したか之亦効なく全然失敗に終り一萬噸の巨體は依然として坐礁狀態で危險は刻々に迫り已ればむ無く乘客を下關に上陸させ十三日午前積荷全部の陸揚を開始し最後の手段で漸く離礁する事が出來た此費用だけでも約二萬圓を費消したとの事である

▼第二回 の引揚作業を滿潮に乘じて

▼今朝更 に揮き續けること三日午前十時から

▼好成績 を示したのみか最後に二百四十點と云ふ同選手は昨朝グレニー球場にて撞切り平均點四十弱の三點を得たるのみで惨敗した尚菅沼選手は昨朝グレニー球場にて撞切り平均點四十弱の三點を得たるのみで惨敗した尚菅沼選手は昨朝グレニー球場にて撞切り平均點四十弱の練習に於て二百五十點のハイランを特疲勞せる爲め球を其まゝにして

▼今朝更 に揮き續けること三日午前十時から

▼振付 けに成る三藤紋太郎氏が當り目下專ら稽古中にて藝題は繪本太閤記(二條の御所、本能寺合戰、返し春長切腹の場、尼ケ崎十段目)義經千本櫻(道行、忠信物語)假名手本忠臣藏三段目、桐一葉片桐館、千代萩

◆菅沼選手 益々振ふ

二百四十の高點

廿六日夜ラグラン選手を破れる撞球家菅沼忠雄選手は一昨夜同じくボーム桁球場に於てラグラン氏と再戰し三百五十點を九棒にて撞切り平均點四十弱の

▼好成績 を示したのみか最後に二百四十點と云ふ同選手は昨朝グレニー球場にて撞切り平均點四十弱の練習に於て二百五十點のハイランを特疲勞せる爲め球を其まゝにして

▼今朝更 に揮き續けること三日午前十時から

▼振付 けに成る三藤紋太郎氏が當り目下專ら稽古中にて藝題は繪本太閤記(二條の御所、本能寺合戰、返し春長切腹の場、尼ケ崎十段目)義經千本櫻(道行、忠信物語)假名手本忠臣藏三段目、桐一葉片桐館、千代萩

◆素人演劇

上町商店員有志が

六月下旬に擧行す

日本人街各商店員有志の催しにかゝる素人劇は日本人街秘藏展協賛品勞の賞品券の賞品券たる六月二十三日及び二十四日の兩夜スコチシ・ライト・テンプルにて開催さるべき筈なるが

▼振付 けに成る三藤紋太郎氏が當り目下專ら稽古中にて藝題は繪本太閤記(二條の御所、本能寺合戰、返し春長切腹の場、尼ケ崎十段目)義經千本櫻(道行、忠信物語)假名手本忠臣藏三段目、桐一葉片桐館、千代萩

◆日米人合同で

日本舊劇

當市日本人が

依頼を受けた

當市ブラシュ街ブレアス倶樂部は八百名の會員を持つて居るが其大多數は藝人と云つても良い位に好劇家を集めて居る此の人々の催しで日本の米人に見せたいと云ふ希望から澤村訥十郎併に三藤紋太郎氏等に謀り芝居の上場藤政太郎氏等に謀り芝居の上場の同氏等は充分の費用持で選る事となり期日を交渉中であるが多分近々一座を組織して同倶樂部で上演される

◆推薦され

二人の名審判者は

適材を得たファンの欣び

明日ユーイング、フキードルでドに集まる數千の觀衆が此上も行はる本社主催加州同胞野球大會が願くば圓滿に公平に且つ愉快に終了せしめたいと云ふ希望は本社が最初より高調した所であつて此希望は

▼全加州 數萬のファンが夢しく抱く處であると信じるが故に主催者として本社は目下最善の力を此爲めに盡して居る第一に本社の最も喜びとする所は當日の三大ゲームの審判者としてミクシヨン・リーグ會長ニーロン氏の推選に依りボビー・ヴエロー、モリス・スウイニーの兩氏を得たことで

▼兩審判 者の經驗と技能とは既に充分の定評がある、ヴエロー氏は球審を專門としスウニー氏は塁審の專門家で兩氏共に長くミツシヨン・リーグの正審判員たると同時にコーストリーグの補助審判として聲名あり ニーロン會長が幾多の審判者中より特に右兩氏を

▼推薦さ れたことは深く信じる所あつてのことゝ思ふ斯くの如き名審判者を得たことは當に我社の喜びたるに止まらず參加チームの滿足する所であり且つ當日ユーイング・フイール

◆美事な銀杯と

優勝旗陳列

昨日は五車堂

本日は大成堂

本社主催の加州同胞野球大會の優勝チームに授與する榮ある優勝旗と優勝盃は昨日五車堂の店頭に飾られた藍地に浮き出る樣な月桂冠を現した他しい程美事な優勝旗は非常な人氣を呼んで同店の前は忽ち人山を築き押すな〳〵の盛況を呈した本日は此優勝旗並に優勝盃を青木大成堂の店頭に陳列し一般の觀覽に供する事とした

◆今日乘込む

地方軍

今夜勢揃ひの

招待會を催し

愈々優勝大試合は明日と迫り參加の各軍は今日續々桑港へ乘り込で來る、櫻府軍は本日午前十一時五十分フエリー着の電車で乘込みポスト街一六五一の安藝ホテルに投じ布市軍は午後六時十分フエリー着ポスト街一七三四のミカド・ホテルに投じ佐市軍は午後七時から桑港へ乘込む筈である、櫻府軍は本日午前

▲桑港で 催される晴れの野球爭覇戰に乘込む期日も追つて十一時五十分フエリー着の電車で乘込みポスト街一六五一の安藝ホテルに投じ布市軍は午後六時十分フエリー着ポスト街一七三四のミカド・ホテルに投じ佐市軍は午後七時から桑港へ乘込む筈である、櫻府軍は本日午前

▲百人分の 赤色ハンカチーフを寄贈するから希望者は來店請求されたしとのこと又當市の不充分にて放免され六日前に出

◆火の矢組又戰ふ サター組運動場

一萬圓

引揚に費した

門司沖の坐礁詳報

東瀛の安洋丸が十二日午前四門海峡埋之浦沖で坐礁した事件は當時本社東京特電で報じた如くであるが其引揚は非常な困難を極めたる事が

▼近便着 の日本新聞に記載されて居る其詳報を見ると安洋丸は埋之浦に差蒐つた時大音響と共に淺瀬に坐礁したので當時船客は四百七十八名荷物五千七百七十八噸を積載し居り船體の前半は海底泥土深く突込みランチ甲飯夫が死力を盡しての引卸も効を奏せず磐石の如く動かず時に決行したか之亦効なく全然失敗に終り一萬噸の巨體は依然として坐礁狀態で危險は刻々に迫り已ればむ無く乘客を下關に上陸させ十三日午前積荷全部の陸揚を開始し最後の手段で漸く離礁する事が出來た此費用だけでも約二萬圓を費消したとの事である

◆安洋丸坐礁で

一萬圓

引揚に費した

門司沖の坐礁詳報

東瀛の安洋丸が十二日午前四門海峡埋之浦沖で坐礁した事件は當時本社東京特電で報じた如くであるが其引揚は非常な困難を極めたる事が

▼近便着 の日本新聞に記載されて居る其詳報を見ると安洋丸は埋之浦に差蒐つた時大音響と共に淺瀬に坐礁したので當時船客は四百七十八名荷物五千七百七十八噸を積載し居り船體の前半は海底泥土深く突込みランチ甲飯夫が死力を盡しての引卸も効を奏せず磐石の如く動かず時に決行したか之亦効なく全然失敗に終り一萬噸の巨體は依然として坐礁狀態で危險は刻々に迫り已ればむ無く乘客を下關に上陸させ十三日午前積荷全部の陸揚を開始し最後の手段で漸く離礁する事が出來た此費用だけでも約二萬圓を費消したとの事である

◆日本倶樂部

通常總會

會費値上と新役員

桑港に於ける下町實業會を中心せる日本倶樂部は去る八日大正十年度の通常總會を開きたるが昨日其結果を發表せり右によれば事務會計の報告及び承認あり外毎月の會費三弗を

▲四弗に 訂正せることを評議員選擧の結果左の十名當選

▲土井慶吉▲小畑久太▲國府精一▲川島清作▲小竹法經▲中瓦之助▲大澤榮三▲手島知禮▲今島酒爵▲矢田七郎

右評議員中より會選の結果會長に土井慶吉、副會長に川島耕作氏當選せること、毎週金曜日を會食日と定め可成倶樂部に會食することを等を定めたりとあり

◆更に審議さる

金融組合

在米日本人農事部委員會は昨日午後二時半より在米日會にて開會し協議の結果左の通り

▼舊慣 を在米日會農事部委員會は昨日午前十時半より在米日會にて開會し協議す

一、農事部事報告は松岡技師より夫々報告を爲す

二、農業調査の件は在日會案の大綱朝鮮

採用する事に決し各農家は一樣に本組織を使用する事となりたれども一ケ所訂正する個處ありフレ部坂本藤吾氏より訂正個所の塗者者を提出し訂正の上成べく早く印刷に附す事

三、農業調査に關する件は農業調査に必要な各地の狀況を統一的に調査する事

四、各地の印刷物の調査の上各自會に配布

五、各種農業の經營標準調査研究の件は委員に於て引續き研究を繼續する事

第二州內及び州外の農業視察及び調査の件は時期を見て地方の視察を爲す事

第三農業金融組合組織奬勵の件は同胞農家の監督を要し且つ重要事件なるを以て慎重なる審議なる事と爲し爲め地方に設在する金融組合陪審組合奬勵發達に努むる一方組織方法を委員に研究する事

▼喝采を 博したのは一昨夜同市日本人の催しで俳優居り、今は紐育にて同氏は俳優になつて居るさうである矢張レニーヂ氏と共に寺小屋の芝居を爲した現理事のトラブ氏が今度の催しは熱心に專ら折衝に當つて居り更に事に依つてはマーケット街や其他地方にも行つて遺り白人一般に觀劇せしむる計畫があると

◆太樂事件

形勢有利

▼公判第四日

新證人出づ

ターラック日本人追放事件は昨日も午前十時より引續き證人の取調訊問あり檢事の質問に續いて辯護士のクロス・エキザミネーション行はれたり昨日の證人六人內に白人一人あり新證人として丸本重太郎氏加はれり取調の模樣によれば日本人側に取り有利に見ゆる審問願る詳細に渡れる爲め願る長引き午後五時未了ゆ儘閉廷せるが次週火曜日午前十時證人取調を續行することを裁判長より宣告ありたり

(廿八日午後六時半ターラグ電話)

◆苺籠使用の注意

十二號の法定ザイス

苺バスケットの重量相違の苦情が常に絶へざる爲め耕作者及び仲買人共同してネット重量十二オンスの法定ザイスの標準籠を用ゆる樣にと今回度量衡支局次長のチャーレス・ヘイデン氏より注意あり

◆徴兵屆郡明料の殘額

徴兵延期の電報證明を爲したるもの中にて當地總領事館より昨日同證明料の殘額を各自居住の日本人會に郵送せるが其の氏名は次の如し

福岡縣人 米倉雅代藏(電報證明料殘額十三弗四十四仙エンジン日本人會送付)▲福岡縣人 原田長五郎(殘額二十八弗八十四仙王府日本人會送付)▲福岡縣人 白河由松(殘額十一弗二十仙スクトン日本人會へ送付)

◆廣告

桑港ポスト街一八〇七

電話ウエスト七三六三

シンガーミシン

みとま

桑港ポスト街一六九九

電話ウエスト三三六六

松屋

御菓子司

桑港ポスト街一六九九

電話ウエスト五三六六

よもぎ餅 かしわ餅 御菓子 勉强調進

桑港フイルモア街二〇〇九番

電話ウエスト三三六〇

元吉寫眞館

(電話)店ウエスト五五四

(毎月第三四金曜日休業)

桑港フイルモア街一六三三

電話ウエスト六三六〇

原田寫眞館

(ポストとゲーリーの間)

電話ウエスト九三七一

大河原法律事務所

T. Okawara Hearst Building San Francisco Tel. Sutter 3127

和洋食料品雜貨 株式會社 新亞細亞商會

桑港ポスト街一六九五

電話フキルモアー二七九三

御祝儀 佛事用 勉强堂

桑港グリー街一五三三

電話ウエスト七五二七

御祝、佛事用 かしわ餅 勉强堂

桑港ポスト街一六九五

電話フキルモアー二七九三

御祝儀 佛事用

菓子司

富士見屋

桑港ラグナ街一六〇八

御祝儀 佛事用

菓子司

富士見屋

桑港ラグナ街一六〇八

再開業(四月廿二日より)

理髮師入用 藤井榮

桑港ブキヤナン街一六〇一

藤井理髮館

パナマ靴商會

桑港ポスト街一七一七

王府サンバアロ街一八五三

最新式(モーターサイクル、自轉車)

(小供乘物車並に附屬品一切)

桑港市ポスト街一八二四 電話ウエスト八三九六

販賣修繕

輸出卸小賣 部谷自轉車商會

(住宅電話)ウエスト二四四〇

谷靴店

新荷到着

婦人靴部

販賣部

大勉强

グリー街一五〇九

電話ウエスト八七五五

青木譽志夫一行

▲新派晴友會劇

▲新派連鎖劇

第一活動寫眞部 辯士 辻岡風波

第二活動寫眞部 辯士 秋田遊民

第三活動寫眞部 琵琶人辯士 秋山みどり孃

加州 桑港 桑港興行會社

支配人 松葉美佐子

奥定吉

申込所 桑港グリー街一五〇五 電話ウエスト八七六八

中山法律事務所

T. G. Nacayama L. L. B. 1562 Webster St., S. F.

電話フキルモア二九一一

門野普光

桑港ブキヤナン街一六四四 電話フイルモア四六二

醫科大學專門教授紹介並に通辯、大學病院入院及び大手術監督等遺憾なく懇切に取扱申候

藤本商會

カ子正味噌糀

桑港ウエストン街一四〇

電話カネー三三九

太田商店

シンガーミシン

◎ムスクツチ……五仙ヤード

桑港ブキヤナン街一七一二

電話ウエスト四〇三七

著者 嚴谷小波 田山花袋 廣津和郎 碧瑠璃園 宇野浩二 中里介山 田中王堂 生方敏郎 賀川豐彦 芝染太郎 山崎貞 米國聖書會 印刷局職員

小波 春 浅 ウエスト 伯爵 モントクリスト 光と千鶴子 安兵衛 清澄に歸れる日 創造と享樂 三都見物 死線を越ゆ 同太陽を射るもの ABCの讀方より 英和對照新約聖書錄

定價

一、〇〇 二、〇〇 一、五〇 一、五〇 一、七〇 一、五〇 二、八〇 二、三〇 二、八〇 二、八〇 一、〇〇 一、八〇 一、五〇 一、六〇 三、〇〇

よろづ商店

株式會社

1300-4th St., Sacramento, California

天商會

天下一品

桑港ポスト街一八〇七

電話ウエスト三三六六

1584 Post St., S. F. Calif.

◇船……

桑港ブキヤナン街一六二一

電話ウエスト八八七七

桑港ポスト街一六二一

電話ウエスト八六七〇

桑港ゲーリー街一九九七

電話ウエスト六一五一

桑港ゲーリー街一五二一

電話ウエスト五三六〇

桑港ゲーリー街一五二一

電話ウエスト五三六〇

桑港ポスト街一六九九

電話ウエスト五三六〇

桑港ポスト街一六九九

電話ウエスト五三六〇

桑港ポスト街一六九九

ロスアンゼルス (廿七日)

●ビクトリヤ事件の眞相

▲正式賣買は未し

東一街ビクトリヤホテル事件の眞相に就ては一般其眞相を知らざる模樣なれば聞き得たる處を報せんに同ホテルはアルコ土地會社よりグレンなる白人五萬五千弗にて購入の契約をなしグレンが甲妻、西山兩氏に六十ケ年のリースを契約し同時に一萬五千弗を兩氏よりグレン氏に支拂ひしは甲妻、西山側の主張なるが一方旅館組合及び井上現經營者は同ホテルは明年十月まで井上氏のリースなし居るものにて賣買成立し居らず該リースの効力を失するものなりとて兩者の仲介調停を進めたるものなるが登記所に就て調査の結果契約は事實なるも賣買は完成し居らず依然アルコ會社の所有なればグレン氏が之を購入したりとして六十日間に立退を強要する必要なく依然井上氏は十八ケ月を營業するものなりとて主張し茲に調停成立せんとせる同問題は破裂するに至れるものなるが何れ本問題は當地の發展を見るならんと

●暴徒檢擧嚴重 イングルウードに於ける白衣團の暴行に關しては檢事局は極力檢擧に努め其の本部に至りて同團レコードの押收をなし根本的荒療治を加へんとし又檢屍裁判は警部シヤンボー氏をしてクラックスクランの行動なりと自白せしめたる探索長ドーラン氏等に屢々强迫的電話を通ずる者あるより其筋にてはドーラン及びシヤンボー兩氏の上には頗る警戒を加へて萬一の暴行を防ぎ絶對關係者を檢束する方針なりと

●羅府道場追立 東二街三三四の羅府道場は月三十七弗の家賃なるが家主は日本人にてグロサリー營業の爲め百弗を支拂ふものとし百弗なるも貸與せんと値上げし來りたるより伊藤氏は歸國中にて如何ともなす能はず留守居の池上夫人の交渉も容られざるより本月限り立退く事となれりと

●日本趣味紹介 當市エベル倶樂部内のコスモス倶樂部にては二十五日日本趣味の研究をなすため集會したるが出席者百五十名乾敏授司會の下に乾夫人の茶の湯說明、平岡、宮澤、瀨尾の三婦人茶の湯の實驗をなし次に乾氏より日本音樂の紹介をなし瀨尾夫人琴を奏して來會者の研究資料に供したり

●青年會鉛筆デー 日本人女子青年會にては活動範圍擴張の爲め二十九日を鉛筆デーとし各所に於て鉛筆の販賣をなし利益の一端を活動資金となす由

●平原と瓜擴人夫 本年度は英町も多く隨つて人夫も非常に多くを要するを以て同平原耕作者一同は賃金も高率とをす方針にて募集中なりと

●駐米伊國大使來羅 米國駐在伊國大使ヴリチ氏は二十七日來羅正午市役所に於て公式歡迎會あり後晩餐會開會されたるが日本側よりは大山領事出席したりと

●本願寺地方講話 稲川開教使は土曜日アーリングトンへ出張又稲川、大野兩開教使は來る三十日ハリウード眞宗教會に執行せらるる釋尊並びに親鸞聖人降誕會に出張し特に活動寫眞を持參しフイルムは大人に對するも青年に對するも少年に對するもの等を選擇しあれば一般に大滿足をあたへたる事ならんと

●羅日會計 羅府日本人會三月分の總收入金貳千五百廿四弗五十仙▲諸費明細▲繰入廿五弗▲食料金二千三百廿五弗五十仙▲前月分繰越金二千三百廿五弗五十仙▲合計四千七百八十八弗五十七仙▲支出二千百八十一弗四十八仙▲差引繰越二千百八十一弗四十八仙なりと

苺相場持直す

▲ピー及び蕊漸落

去る廿五日(火曜日)南市場への苺トロベリー出荷量約三千五百クレーツに達し出荷況崩落して二弗五十仙乃至四弗となし爲め廿六日よりモネタに於て一貨車の出荷しつゝあるも市況は目下の處ピーシシップを斷行したので市況少し持直したるが今二十七日は更に撥返して三弗五十仙より五弗メッカ產上物にて五仙に崩落したり他は推して知るべし

▲ピインズ サンピドロ方面のケンクラキー初荷は二週間後なるべく今二十七日ヤロー物牛後許もサンピドロより出荷ありたるが相場斤卅仙内外なりきと

▲市價調節 の爲めモネタ、ガーデナ方面より毎日二三貨車ヤシンプを斷行し少くとも三弗以上四五弗の組場を維持する積りなりと苺組合員の語る處なり

▲ピー 各方面よりの出荷激增しつゝあるを以てサンピドロに於ては市價調節の爲め東部シヤンプを行ひ居れるも目下の大勢は遂に長男明治正(十歳)は本日午前七時十五分西山清次郎、エッチ田中の運轉にて直ちに佐軍と共に今晩の少年男女は一隊を作つて出陣し王府學生倶樂部は由來花々しい援援隊を以て世に鳴つてるが隣市の征旅を祝福し且つ潮東名譽の爲に亞軍を後援するのである王府軍は更らに櫻府軍本倶樂部と年來對峙する關係上此加を代表して來襲する櫻軍をバックする言ふ意氣込だから素晴らしい人氣を呼んでゐる

▲病氣 明日午前十時から開始される佐市對櫻府の對抗戰は明日試合中最も興味ある合戰だから多數のファンは午前から出かけて一日を野球ピクニックに暮らすのである

●野球試合 コンコード大亞武路チームは廿三日午後一時よりフレスノ高等學校チームを迎へ野球試合を爲したるが六對三の組合教會に參スコアにて大亞武路青年會側の大勝に歸したる由觀客多數なりと

●再渡米 エルムハースト花園大學出身の嶋菊太郎氏は日本へ歸國中なりしが來月三日着の太洋丸にて新婚同伴再渡米する由なり

●花屋の景氣 數日來エルムハースト方面に於ける花屋の景氣は非常に良し外花減少したる爲め溫室育ちの花の賣れ行き良好と成り一週間前に一束十仙乃至十五仙の薔薇花今は七十五仙に騰貴せりと

●麥嶺協友會記事 明日曜日午後三時麥嶺協友會事務所に於て協友會及び勞働會合同主催にて來る十一日の爲め送別會を催し向會員は協友會新入會員諸氏の歡迎會を兼ねて行ふ由中野泰嶽氏より協友會へ金十弗寄附せり

●ブロッケン發生 サンガモン在住者池垣氏夫妻は二歳の男子を伴ひ數日前出王山麓旅館に宿泊中なりし處一昨夜右の子供がデフラリヤに罹り重態に陷りしかば醫師を迎へて直ちに郡立病院に送り山崎產院を消毒せりとの事なれば子を持親は注意すべし

●慰勞會 王府商業以教會にては過日行へるピクニックの慰勞會を昨夜行はれたり右ピクニックに於て五十一弗五十五仙の寄附諸方より有りたりと

●講話紛擾解決 刑事問題を惹起せん形勢にありし既報麥嶺鄙母子轉の紛擾は其の後王府日米興信社木村氏の斡旋に依り委員側は責任を重じ被害金額一千五十弗を賠償する同時に爲替金消費者より同額の金員を回收する事となり公沙汰とならず解決を見るに至れる由

●病氣 王府支部料理美洲樓主人藤田廣三郎氏は胃の病氣にて引籠中なるが來る廿日曜日朝切開手術を受ける由なり

●寄附 東王府中南大郎氏は次男順次出生祝金として孝眞佛教會並びに同婦人會へ各五弗宛寄せり

日曜の諸教會

◎羅府基督教會 日曜學校青年科午後一時半幼年科午後二時半禮拜說教午後四時臨「大いなる機會」臨牧師◎羅府美以教會 午前十時日曜學校「荒野開拓の代償」春山崎學士◎羅府聖教會 午後七時說教題「荒野開拓の代償」春山崎學士◎羅府聖教會 午後七時半心靈祈會「井戸の讃歌」(一)極牧師◎羅府聖教會 午後八時エヴヤ同盟會◎羅府聖教會 同會者吉村賀作氏「聖靈降臨」米田氏◎羅府聖教會 早天祈禱會◎羅府日曜イングリスト教會 午前十時青年學會午後三時聖書講義王川氏◎羅府聖教會 午後四時說教◎羅府聖教會 午後八時講話會◎羅府聖教會 午前十一時日曜學校◎羅府聖教會 午後八時講話會◎羅府聖教會 同會者家族芳夫氏「第二の信仰」石本義氏◎羅府聖教會 午後四時說教

スタクトン（廿七）

舎費の即納を 父兄に促す

▼本納と不足が實に二千餘弗

須市兄童寄宿舎の舎費が滞りちで當局者が非常に遺憾して居る事は嘱て報道した通であるが其後舎々形勢悪化の傾向があり爲に教育上の設備をする事も出來ないで兄童に悪影響を及ぼす恐れがあるから此際父兄に概して舎費の即納をして貰い度いと云ふので青木舎長から左の督促狀を父兄に送つたそうだ

▼本年度の不足を來す

拝啓　時下益々御清祥の段慶賀に堪へません扨て本寄宿舎の舎費は昨年度の不足を補ふ為に今年度の予算を立てましたが、不足の月給で立替へて居ますが、而し四月末の處で學校の不足が五百六十九弗八十五仙の不足が五百六十九弗八十五仙分千六百廿二弗廿八仙になつて居ります最も佛教會から五百弗丈けは最早や私の力では到底支へる事が出來ません學務委員の方でも寄宿舎の事は舎生の父兄の責任で食はせて教育して貰つて月々の舎費を納めないと云ふは不都合千萬である其上學校の不足を來して居るから斷然たる處置を取ると云つて屋まする困る者は只だ私一人です假に今費が一ケ月滯ると約四百弗の未納となる約千二百弗の未納ひの方は如何ねども入る方は少しも入つて來ぬので金の出場に困る方は當然ではありますまいか今日千弗からの金を誰れが無利息で貸して呉れるまいか若し貸して呉れても利子は何處から出るのでせうか誰れが設計しても出るのでせうか誰れが設計しても出る筈はありません私は佛教會の附屬事業である從業員の御世話して居るのです私の立場を充分に考へて下さつたら先掃にして頂くのが當然かと思ひます各位の反省を促がしまして完納を願ひ致します若し貴様が此上に御猶豫なる様であれば私の立場を開いて根本的の解決を付ける積りであります

四月廿七日　須市兄童寄宿舎　青木舎長

父兄各位

若梅醫士檢舉さる

▲無免許で不正手術

市内薩摩屋旅館で去る一月以來開業して居た若梅醫士は今日正午頃一人の州警察官と二人の探偵に依つて檢挙され多くの證據物件を押收された上郡監獄に投せられた夕刊英字紙の傳ふる所に依ると同人は昨年ダーナグローブで不正手術事件で敗訴され五百弗の保釈金を積んだ儘行方を晦ましたので其居所を探索中であつた當時手術を受けた婦人は死亡し遺族者は櫻府監獄に繋がれて居て審判の日を待つて居る關係上若梅氏の出廷は此際最も必要となる所である昨夜一人の白婦人から電話が掛つて診察に行つたのが檢挙のもとに至つた導火線となつたらしい此婦人が探偵と連絡があつて唯一の證人たるべき疑ひを容れぬ所である保釈金千弗は友人間に奔走して明日中に假出獄する運び

になつて居る因みに同人は昨年ネバダ州の醫業免狀を受け加州公認免許も出願中で近く許可證が來る可く豫期されて居たのに今回の不詳事件突發したのは氣の毒であるとの噂さである

●演劇大正大盛　來る廿日午後七時から新藤商店開業に同會に開演する大正大盛は面白き藝題なる上に入場料無料にて一般を歓迎するそうだ

●及川氏から電報　當支社主任及川氏は今朝大連に安着の電報を夫人宛に送つて來た大連には夫人の家族が居住して居る

●州立病院で死亡　去る二月廿五日櫻府日本會の世話で當市州立病院に入院中の高知縣人久松嘉助氏は昨夜死亡したので其親戚に當るキング島八番の川崎正德氏が葬儀方面の世話をして居るが

●葬儀　一昨日船中で死亡した鳥羽氏長女の葬儀は昨日佛教會で執行した

●青年會の活動寫眞　來る廿九日午後八時から基督教青年會で開かれるが其席上で米人ロリン軍出征ローダイにて午後二時より會歌する筈なりと

●入院　フォリンの農業家山口縣人健本彌一氏は心臓病にて當市ユニキス街二千六百五番のミセスパンデー療養院に入院

●不老林翁横臺野球戦　フロリン對横臺兩軍の野球戦は五月初旬と傳へたるが來る三十日に午後三時から横臺野球場にて

●出生　オークパークの農業家増原繁次郎氏四女艶子四月廿四日に出生せりと

●新聞　東ウッドサイドの農業山口喜助一部氏より長女道子師國記念に河崎佛教日曜學校に各十弗づゝを山口喜人白水榮樹長女故後子追弔記念として五弗ロリン山口徳人會に寄附せる由

桑港行特別 割引切符は

（廿八日）

よろづ、東西の外に津田、崎山、田舎の諸商店でも賣捌いて居る大人往復三弗廿五仙十二歳以下

●小供一弗六十五仙

苺の市價好況

（廿七）

例年より約三週間も遅れた櫻府の苺の取扱開始

例年は原の苺も兩三日前よりポツ〳〵各所のランチより出荷開始をなるしは飽報の通りなるが今其の市價につき聞く所によれば例年とは少しも異なるなく寡ろ豫想外の好況にて昨日までローカル・マーケットにては最上等品七弗より六弗までの間を上下しつゝありと云ふ而して本年は苺の品質如何によつて其の價格に多大の相違あるべしとの事なるが一般は先ず上等品に對しては昨年に比べ一般は先ず上等品に對しては昨年に比べ一般は先ず上等品に對しては昨年に比べ

A True Friendship At Last.

THE SO-CALLED AMICABLE RELATIONS of America and Japan, so full of hypocrisy and falsity for a long time, are changed completely as a result of the Washington Conference, The Japanese American News said in Japanese yesterday. Now America and Japan appear to be true friends, and the appearance carries a wonderful significance.

The federal government is said to have asked the senators and representatives from the Pacific Coast to exert their good offices toward quieting the anti-Japanese movement. We do not know how seriously the request will be taken by the Pacific statesmen, but it is certain that the Harding administration believes in maintaining friendly relations with Japan.

In Tokyo plans have been completed for a reunion of the United States Naval Academy class of 1881 and the Japanese government has extended invitations to the secretaries of war and the navy and the veteran admirals of America to attend the function in Japan's capital. This courteous invitation has been accepted by the United States government and preparations are afoot for the transporting of the distinguished visitors to the Orient next month. The finest transport is to be placed at their disposal.

Japan is making many plans for the entertainment of the representatives of America. These plans are as elaborate as those for the entertainment of the Prince of Wales, who recently visited Japan.

There may be many cranks who will condemn these manifestations as meaningless frivolities. But not so. We must scrutinize the plan from another angle, and one more sensible. Business men of both countries have exchanged visits in the past. Their aims, so far as they were made public, were to foster amicable relations, and they really carried out their undertakings to a mutual advantage. What they did was watched carefully and dubiously.

But the contemplated visit will be vastly different. Now there is no occasion for suspicion.

What is termed the friendly relation of America and Japan has prevailed for years and we almost are tired of hearing of it. The same kind of people in both countries talk about it continually. They seem to make a business of it. And cranks have raved, while the public has paid little heed.

Quite natural. For while compliments were being passed back and forth, the newspapers of the two countries and the politicians were hurling the most offensive epithets at one another. And then along came the Washington Conference and the atmosphere was completely cleared. We don't say that every little seed of dissension between the two countries has been completely destroyed. But the sentiment has changed. And this change of sentiment is a great factor in the solving of many vexatious problems.

What we Japanese in America must bear in mind is that we should not seek hurried solutions of the immigration and land problems. We must not try to shoot down the stream on a surf board, for beneath the surface there may be unseen rocks. The time was when the majority wished to sail to the distant island of solution over a troubled sea of dangerous sunken problems, propelled by a treacherous breeze of so-called amicable sentiment. There are those who even now adhere to this idea. But it must be remembered that this mistaken idea has misled us and drawn us into the stormy sea of trouble and suffering. We must avoid this in future.

As we have said over and over again, neither the land question nor the immigration problems should be made a basis for international negotiation. Because sentiment has turned into a smooth channel, in the event that we attempt through diplomacy to solve those problems the only result will be the souring of that good sentiment. We must never put our dependence upon public sentiment, which is fickle, nor are we to expect anything from the officials of the Japanese government.

From first to last we must endeavor solemnly to solve this problem ourselves, through our own efforts, sincerely. Herein lies the key to the solution of the immigration and land problems. In reaching this determination, we must be on guard against unreasonable proposals advanced by diplomats and politicians of our home land, for these will tend only to destroy the good will already engendered.

If we watch carefully the actions of the so-called agents of diplomacy and politics and follow the Roman road to solution, keeping an eye on the officials of Japan, we may be able to make good use of the sentiment prevailing today.

The Radical Control Bill.

THE BILL for the control of radical social movements submitted by the Government to the House of Peers on February 18 was subsequently referred to a special committee which at last passed it on Tuesday with amendments, said the Asahi, one of Japan's leading newspapers, recently.

Much has already been said by scholars, lawyers and journalists with regard to the inconsistency and anachronistic character of this bill. Although we deem it necessary to lay down suitable measures for keeping the movements of radical elements tainted by nihilistic and communistic ideas under proper control, it is irrational to try to enforce a law whose text is made vague and ambiguous by the use of such phrases as "those who propagate or attempt to propagate the tenets and theories of nihilism, communism, etc., or those who abet or induce movements with the object of disseminating similar dangerous thoughts." Not only so, but the law may be so interpreted as to restrict, in a large measure, the prosecution of studies by scholars, forensic debates of lawyers in courts of law, and the editing of newspapers and magazines.

Obnoxious ideas and thoughts ought to be dispelled by the development of healthy ones. It is idle to say that evil thoughts, if materialized into radical social movements, should be rigorously dealt with. But laws and regulations are already in force enabling the authorities to take adequate steps in such a contingency.

The Government does not in the least exercise its care leading bad thoughts into better and healthier channels; it is only concerned with the control of them. The bill in question, therefore, ought to have been decided upon after thorough consideration and discussion, taking into account the opinions put forth in various quarters of society.

The amendments made to the draft measures by the House of Peers, however, have, it seems to us, rather extended the scope of application of the law, although the phrase, "with reference to nihilism, communism, etc.," has been struck out thereby. In short, the committee in the House has introduced certain amendments into the bill in a perfunctory fashion in order to conform to public opinion, with the result that the sphere of working of the law has been enlarged much against the wish of the general public. At the same time, we have clearly understood that the members of the committee, except Baron Izawa, are sadly ignorant of the tendency of thoughts at the present time. Lacking sufficient knowledge to gauge modern thoughts as they are, however, they should have delayed in passing the bill in view of the strong opposition to such legislation among the people. All in all, the conduct of the committee is destitute of sincere sentiment for popular desire.

The bill, having vital relation with the people of this kind, ought to have been submitted to the House of Representatives. But as it was placed under the consideration of the House of Peers erroneously by the authorities, the House should pay its very best attention in weighing and discussing it. A similar law was put in force in Germany in bygone days under the Bismarck administration, it is true, but then the country was anything but peaceful.

Although regulations with identical purposes were issued by the United States Government years ago, still they were intended for the prevention of violent actions by spies and agents of enemy countries in war time. Last year Germany was once again called upon to promulgate a law for controlling popular thoughts, but the state of things there at that time was extremely turbulent, almost bordering upon anarchy, ending in the assassination of President Erzberger.

If our authorities wish to put such a law in operation in this country, the people may be greatly agitated by fear whether our thoughts and ideas are taking so dangerous a turn as to require rigid control. We want to ask the authorities to point out where danger to the thoughts of our people lies. Are our people's minds really infected with poisonous thoughts coming from abroad?

We make bold to declare that the ideas of our people concerning national constitution and government remain as unshaken and sound today as ever before. We notice that their thoughts are subjected to vicissitudes, but the spirit of loyalty to the sovereign and devotion to the cause of state is intact. Also, it is a cause of our constant joy that, albeit our traditional moral sense is undergoing gradual changes, our fundamental ideas respecting national policy has been absolutely unperturbed. Under these circumstances, if the Government carries out relentless suppression and supervision of thoughts all of a sudden at the present juncture, it will adversely affect the conception of our young people concerning our thoughts and morals and make them have a strong leaning toward radicalism. This point must be most carefully considered.

The House of Peers is in duty bound to follow the trend of popular thoughts closely always, so as to safeguard peace and law in the country. Therefore, it is a great mistake to deal with the bill now before it in a cursory manner. We are hopeful that when the bill comes up for discussion in a regular meeting of the House, the Upper House will reject it for the true interests of the nation, deferring its final decision till another opportunity. We are now advancing this argument not for the purpose of attacking the Government but for the sake of national welfare and future good of the people. We are solicitous that the members of the House of Peers will pass their fair judgment on the question.

ORIENTAL ARTS COMPARED.

A JAPANESE visitor to Europe recently complained that no interest is now taken by us in the art of his country, writes Arthur Waley in the New Statesman. Everywhere in European museums he found that Chinese exhibits were attracting attention and Chinese designs being copied by students. He wrongly attributed this to our disapproval of Japan's autocratic government. I can assure him that most of the students who copy Chinese paintings have not the least idea that Japan is not a benignly-ruled British colony. As for China, most likely they think she is under the Grand Crim of Tartary.

The case is much simpler. Judged by the standards which now prevail, Chinese art and literature stand definitely higher than Japanese. And these standards are not mere results of fashion. Rather, they grow out of those subtle psychologist changes which, occurring from generation to generation, determine successive phases of taste and fashion. To this, of course, must be added a good deal of snobbery.

Thirty years ago the European aesthete thirsted for elegance and delicate craftsmanship. He found them in the Japanese *hokku* and woodcut. He knew little of Chinese culture, but vaguely supposed it to be "like the Japanese, only more so." Chinese painting was almost undiscovered; Chinese literature was, to suit the current taste for sensiblerie, unconsciously Japanicised by those who introduced it to Western readers.

JAPANESE POETRY'S WEAKNESS.

Then came a phase in which elegance was detested and craftsmanship regarded only as a means. Moreover, those words and ideas ("willow-tree," "geisha," "plum-blossom," "Fuji") which like magic keys, had opened the gates of reverie, now lost their spell. Eastern art was judged by the same standards as Western, and it was found (to take only one example) that Japanese poetry, with its interminable blossoms and moonlight, was often making an appeal merely to love of nature, an emotion not in itself any more "aesthetic" than sexual excitement. The naked essentials of poetry were found to be wanting.

It is, however, perfectly natural, since the beauty of poetry depends on the exact words used, that translations should seem to lack such beauty unless they are made by poets who infuse a new beauty of their own. Hence it would seem to follow that translations of poetry are either not poetry, or else not, in a strict sense, translations.

This is almost true; but it must not be forgotten that there are certain elements, such as the main "design" or structure of the poem and the sequence of images and ideas, which though probably subsidiary in poetry are purely aesthetic in their working and yet are capable of transmission from one language to another. Now Japanese poems are so short that these subsidiary elements scarcely have room to develop. It is for this reason that even the best are untranslatable, and not because they are lacking in the main essentials of poetry.

CHINESE POETRY'S STRENGTH.

In Chinese poetry, on the contrary, the subsidiary elements which I have named are developed to an unparalleled degree, particularly in the longer poems (say, from twelve to thirty lines) which form the bulk of any Chinese poet's work.

If Japanese literature is to resuscitate itself in the eyes of the West it will certainly be through its prose, not its poetry. But here again a difficulty meets us. The best prose was undoubtedly written before A. D. 1100, and consequently in a language which is almost as different from the modern as Beowulf is from H. G. Wells. The texts have never been properly edited, and knowledge of the ancient language appears to be almost extinct in Japan. Take, for example, the Genji Monogatari, a romance amazing both in matter and extent. The text is so corrupt that a literal and complete translation is obviously impossible. Baron Suyematsu, who published in the eighties a version of the first seventeen chapters, attempted no more than a summary of the story, and appears to have used one of the numerous abridgments of the work rather than the romance itself. Yet an attempt to translate all that is translatable would be well worth making, for the literature of the world contains no other work remotely resembling this. To indicate here even the general outlines of a novel twice as long as Clarissa Harlowe would obviously be impossible.

FROM THE GENJI MONOGATARI.

I will summarize an episode in the sixth chapter. Prince Genji was formally married at the age of twelve to Princess Aoi. Before the marriage was consummated he fell in love with Lady Rokujo, a widow eight years older than himself. This lady was of a temper so virulently jealous that her hate blasted any rival who stood in her way. When Genji, though still the lover of Rokujo, was compelled by social conveniences to make a show of joint life with Aoi, the unfortunate princess pined away, withered by a hatred which she had done nothing to deserve. The same fate attended Yugao, Genji's next mistress, and at this point in the story Lady Rokujo disappears into a nunnery.

At a time when Genji was particularly bored and desonoivre, someone mentioned to him a young lady who lived alone in a ruinous, old-fashioned country house near by. It was said that she played marvelously upon the lute. He went several times to the house and heard her play but never saw her, for she sat on each occasion behind a partition or screen. At last the day came when she disclosed herself. "She stood looking into the distance as though she had not seen him; only her back was visible. He saw that she was very tall. When at last she turned her head the first feature that presented itself was a long nose, aquiline and slightly red at the tip. She was very pale, and gaunt in her build. Her clothes were dowdy and old-fashioned. One thing alone she possessed which many beauties might have envied—a magnificent length of hair."

LEAN LADY BORES HIM.

Then began a half-jesting courtship in which Genji became more and more bored by this lean, artistic lady, but also more and more sorry for her.

There was living with him at this time a girl of twelve whom he had adopted, and afterwards married. Coming home one day from the gaunt lady's mansion he found his adopted daughter amusing herself with her paint-box. He tried to join as usual in her play, but could not banish from his mind the image of the angular creature with whom he had so grotesquely become entangled.

Suddenly snatching a brush he drew in the margin of the drawing-book a lady with very long hair, and dipping the brush in red paint he tinted the tip of the lady's nose. Then while the child stared at the drawing he went to the mirror and dabbed his own nose with red.

"Perhaps I shall be like that one day," he said. "How shall you like me then?"

The child was terrified and would not be comforted till she found that the paint could be wiped away.

MENTALITY OF THE NO PLAYS.

I have summarized this minute episode in a gigantic work not because it is typical of the general whole, but because it illustrates, better than any passage I can recall, the extreme and unexpected sophistication of the Genji. The mentality of the plays is that of our own fourteenth century morality writers; that of the Japanese popular drama and novel is even simpler. Yet in this work by a lady novelist of the tenth century are many passages which could be inserted in M. Proust's next volume without anybody noting the intrusion.

Genji is a social hero, a stupendous man-about-town. An amorist as introspective as Stendhal, a master of ceremonies as triumphant as Beau Nash. In shining splendor he moved from festival to festival, his glory broken only by one brief banishment, borne by him as lightly as a summer mountain will carry its single cloud.

It is perhaps dangerous to speak in such terms of a book which one hopes some day to translate. Expectations may be aroused which the transference from one tongue into another may easily disappoint. But since the only sound edition of Genji is at present out of print, the task cannot be begun. Meanwhile, someone ought to republish Suyematsu's fragmentary version, long unprocurable, but well deserving of resurrection.

THE STIRRING BATTLES OF KOKUSENYA.

By Chikamatsu Monzayemon.

CONTINUED FROM LAST SATURDAY.

KINSHO was greatly rejoiced to hear that Tei Shiryo was her father. Her first impulse was to rush to the gate and throw her arms about his neck. But she was the wife of General Kanki, lord of the castle, and such conduct on her part would be looked upon as the height of impropriety. She must not forget her dignity for a moment in the presence of the soldiery.

"All those matters are well known to me," she said, trying to hide her emotion. "But unless you furnish me with positive proofs, I cannot accept you as my father. What proof have you to offer, sir?"

"Give us some proof!" the soldiers chorused.

The old man held up his hands. "My dearest daughter," he said, "if some proof is wanted, you have it in your own possession. Before departing for Japan I painted a portrait of myself and left it with your nurse, to be given you as a memento of me. I have aged since then, but my features are only more deeply graven upon my countenance. I do but ask that you compare this portrait with the features of him who stands before you begging admittance. I assure you, good lady, your doubts will vanish as fades the mist before the sun."

"Yes," admitted Kinsho, "I have that picture, forsooth."

IDENTITY IS PROVEN.

It was a miniature and she carried it always about her person. Removing it now from her bosom, she held up a mirror in such a way that the moonlight cast a reflection of the old man's face upon it. For a considerable time she stood looking from one to the other. The jet black hair and vivacious expression in the portrait contrasted strongly with the wrinkled face and snowy locks reflected in the mirror. But the eyes, mouth and nose of both were so similar that it was impossible to doubt his identity.

Many besides Kinsho had heard the old man and she felt it was safe to cast restraint to the winds now. "Oh, sir, you must indeed be my own long lost father!" she cried. "Forgive me for my seeming discourtesy. For many years I have looked forward to this moment. I was left a motherless orphan here in China. I was filled with grief when I learned that you had returned to Japan. Then I learned that Japan was far to the east, and I used to worship the rising sun, as symbolical of you, every morning.

"How often have I unrolled my map of the world and have studied the countries of China and Japan! On the map, Japan seemed to be very near, but I was astonished to learn that it was three thousand miles away. And I despaired of ever meeting you in this life, so you can imagine how delighted I am to see you, after more than twenty years! My heart overflows with joy and gratitude, my dearest father!"

Both Tei Shiryo and Kinsho wept with emotion. Their tears seemed to mingle with the moonbeams, and the light of fair Luna paled, as though a shower of rain suddenly had descended to earth.

KING'S ORDERS STRICT.

It was Kinsho's great wish to admit the three visitors forthwith. But this was out of the question, for the war was not as yet at an end and General Kanki had received strict orders from the King of Tartary on no account to admit foreigners into his castle, even though they were his own kinsmen. Kinsho told them of the order, adding that she was at a loss what to do.

"It is impossible to disobey the order of the king," the old mother said. "But I do not think you need fear an old woman like myself. I am most anxious to see you. Surely you can let me in, even while refusing to admit the others."

"Impossible!" cried the sentinels, who had been listening to every word. "The imperial order excepts not even women. If, however, you are willing to suffer yourself to be bound with cords, as though you were a prisoner, our lord and master will not incur the wrath of His Majesty, should he hear of the episode. So, old lady, if you insist upon entering the castle, you must be bound securely."

This speech filled Kokusenya with wrath, and he made no effort to conceal it.

"Insolent varlets!" he cried. "You ask us to bind your lady's step-mother? Who ever heard of such an unreasonable demand? We are Japanese, and we shall not endure such insult. If those are his conditions, we shall not meet or consult with your master."

PRIDE IS VANQUISHED.

Taking his aged mother by the arm, Kokusenya turned to depart. But she shook him off, saying: "Patience, my son! If we wish to seek the assistance of another in a matter of great moment, we must put up with affronts and hardships. If our request is granted, I am perfectly willing to be bound with cords, nay, even to be fettered and handcuffed. Therefore, my husband, I pray you, bind me securely at once."

Moved by her words, Tei Shiryo reluctantly bound his wife, hand and foot. Opening the gate, the sentinels permitted her to enter. Seeing this, Kinsho burst into tears.

"My dear father and brother!" she cried. "Forgive the apparent cruelty of the soldiers. They durst not disobey orders. I shall take my sweet mother in my charge, so you need not concern yourselves about her safety. She will tell me about your request, and I shall inform my husband and do my best to gain his consent."

In the event of her husband's consent, she added, she would pour a solution of face powder into the moat. If he refused, she would pour a solution of rouge. If the river ran white they would know the answer was in the affirmative, but if it should run red they would know that General Kanki had refused.

The water which Lady Kinsho used for her toilet flowed down into an artificial pond which led to the moat and thence into the Hoang Ho. Wherefore, in order that they might know the result of the interview of the wife and mother, Tei Shiryo and Kokusenya sat themselves down to watch the current of the Hoang Ho.

TO BE CONTINUED.

SHICHISHI ITO.

BANG! bang! bang! Japanese bombarded the Oakland police headquarters and made the desk sergeant run. But don't be scared. It was not the Japanese-American war. It was the explosion of confiscated moonshine saké.

* * *

FRESNO slogan: "Get the Raisin Habit." Yes, we have the precious habit already.

* * *

AND there were fools who tried to raise watermelons instead of grapes.

* * *

PERHAPS the most prosperous jobless woman is Mary Garden.

* * *

"YOU can't beat a woman," a Japanese saying, is right. Lucien Muratore, who said of Mary Garden: "If she was not a woman I would have killed her," is reported seriously ill.

* * *

WHO says the Bolsheviki are inhuman? They say each Russian delegate to the Genoa conference has bought a 150,000,000 rubles silk hat to be welcomed into the fellowship of the respectable and well dressed.

* * *

IT seems that Genoa is full of rocks to invite the conference to deadlocks.

* * *

MASUNOSUKE KAZAWA, who craves the degree as Doctor of Fish and who turns gold fish to silver, is right when he says: "I am sure there is more chance to study fish in New York than anywhere else."

* * *

TO recognize proposals in principle isn't the monopoly of Japan at Washington, for the Bolshevik recognized the Czar's debts in principle at Genoa.

* * *

THE real Bolshevik at Genoa is France.

* * *

"WHAT is China doing now?" asked an American publisher. We may answer him that the Celestials are playing their favorite civil war game, preparing chop suey and doing a laundry business.

* * *

RUSSIA is a poor beggar in America and a big boss at Genoa.

MOUNTAIN MAN AND WOMAN

LONG white hair covers the body of the Mountain Woman. She is regarded as an ogress—*kijo*—and figures in Japanese romance. Her tendencies are cannibalistic. She can fly about like a moth and traverse pathless mountains with ease.

The Mountain Man looks for all the world like a great dark haired monkey. He is extremely strong, and his favorite outdoor sport is stealing food from the villages. The Mountain Man stands ever ready to assist woodcutters. He will gladly carry their timber for them in exchange for a ball of rice. Needles it is to capture or kill him, for an atack of any kind on the Mountain Man always brings misfortune, sometimes death, upon the perpetrators.

A JAPANESE POET'S WORD PICTURES OF LONDON.

MR. TAKAHITO IWA, a Japanese poet of considerable distinction in his own country, has been staying in London, and in a small volume entitled "Cherry Leaves" he gives us glimpses of our capital city that are refreshingly ingenuous, says the London Daily Chronicle.

Mr. Iwai is an Imagist. He paints his poetical pictures with a few swift strokes of the brush. It is just the impression of a vision. Thus, this one, "In Kensington Gardens":

There arose a silvery mist around a pond;
Slumberingly I loitered beside the resting water;
I found, when I had made a circle of the shore,
A deep evening shadow had already mantled me,
And starlight rings of light glimmered around.

And here is an impression of a London street in the evening:

I walked to and fro in a street at evening,
While the purple shade grew deeper and deeper.
There loitered whispering couples arm-in-arm;
Lovers were waiting for their "sweeter halves";
Many happy cars flashed by—perhaps to the play;
They might be hastening to my favorite Little Theatre;
I stood listening to the murmer of the busy town.

The Embankment seen at midnight is fetched in four lines:

Midnight had fallen upon the river,
Which glimmered like a shrouded corpse.
Just then I heard the boom of Big Ben,
Resounding like the clang of Hades.

Mr. Iwai, whose days were spent in a city office, used often to pass the spring and summer evenings in Hyde Park:

Here where the twilight gleams, I have my dreams—
The new-grown grass to rest me—
One haunting thought to test me—
What if thou yearnest to reach again
Thy Mother Earth, that gave thee birth;
To drain her milk, thou soft green silk?
But I, who stretch my hand, and strive to understand,
Can only falter, knowing naught
Of all the wonder thou hast caught.

Ingenuous is the poet's tribute to "A Pretty Typist":

A pretty girl among the crowd of typists
Always gave me a sweet smile,
I did not see her for a whole day,
And I had a sense of something missing,
As if I had left my watch at home.

And one last impression of the poet himself in a city office, employed in decoding telegrams:

I only tell you about my London life.
My mother, dear.
Can you imagine a little white mouse,
Which is confined in a tiny cage.
Terrified always by the people around,
And has to keep wheeling for their sport?
That pitiful creature am I here in the office,
My mother, dear!

Mr. Iwai's name for England is Rose Land.

By SOSEKI NATSUME.

(Translated by a Japanese Schoolboy.)

THE LETTER look wery beautiful indeed from the outsides anyhow. I don't pretend to know what it are all about on the insides. The sapient master he read it through once and then he knew it were not a letter requesting for a contributions but it were nevertheless awfully like hard one to complehend.

Of course, if the author send it as a contribution to the magazine, they would hurl it straight at the wastebaskit. I suspect that the master so lenient who have a reputation for his opaque quality of brain would tear it up to pieces, but my expectations were all wrong. He read it over and over agen and still yet agen.

Maybe he would like to infer there are some sort of a deep dank and low down meaning in such a letter like this and are trying to learn and understand all of it and more. There are so wery many things in the uniwerse hard to understand, but there are nothing you can't connect with some kind or sort of reasoning.

How hard a writing may be, when one compose his mind to understand it, why, it's a wery easy task to understand it. You may term a man fool or smart. It are understandable either way, backward or forward. Not only or alone that. The terming of a man as dog or pig are no problem to solve.

EASY TO COMPREHEND.

If you wish you may descrive a mountain as low, or not so high, or tall, or far up in air, likewise you may mention the uniwerse as small, or you may say a crow are white, celebrated Komachi a ugly woman or eben Kushami a gent. Therefore such foolish letter like this may be wedded or inseparably linked with some kind of sort of sense and then you can understand. Especially, master so dreadful, who insist to explain Inglish he can't compleheud one way or other for a long time and acquire that habit, being as he admires to extract some sort of meaning from a letter like this.

Once master so effusive been asked why he insisk "good morning" when a weather are so bad by his studint and he thought of it for seven long day and still could not make acceptable rejoinder. Again he were asked by the pupil how to express Chris Columbus in the Japanese and he made a meditation on the question for three day and night to get any answer to it. He are that kind of a man. Master soon looked as though he understood the letter just as nearly as he did that "good morning" and say at himself:

"This sure are great. Deep meaning in it. Authar must be the deep studint of phylosofy. That are indeed the great and far sighted view."

Thus he admired stupendously. We know by this how foolish he are then they also are some good sense in it. Master so tearful have a trait all his own which are to worship everything hard to understand. Perhaps this are not specialty of master.

THE POPULAR LECTURERS.

Something they are something great hidden in hard to understand thing and make us to expect something lofty in the unixpected place. Therefore common ordinary people make noise as though they complehend those thing they really don't know. On the other hand scholards make lictures so hard to understand those thing which are clearly know by each and every one. The most popular professor in a uniwersity are those who licture things too hard to complehend and others who licture too plain subject are not so popular.

The reason why master so perspicacious admire the letter are not that it's meaning are clear but because on the contrary he cannot seem to locate where the main point are. But at the same time he cannot rest comfortably unless he get or extract some kind of meaning out of that letter and so he made his own explanation and make his face as though he got everything out of the manuscript. It have been considered a pleasure from the olden time when one rispect everything one can't seem to understand. So master so good reverently rooled up the letter and placed it tenderly on table and folded up his arms and sunk into the deep meddytation.

Then they arrived somebuddy at the door what loudly implore for the admission. Woice were similar to that of Meitei but it were also so unlike of him to beg admishun that way repeatedly.

HE HEARS ALL RIGHT.

Acute master seem to hear the woice instantly in his studdy from the beginning and he kept folding his arm up and didn't intend to move or budge. It might be his policy not to wenture to the door as he are indeed the master of the house. At any rate, he have never greeted people from his studdy.

The serwant goil went out to purchase few bar of soap. Mrs. has went to arrear. Therefore they were only little me what could emerge out to greet the company. But I don't like to forge to the fronts. Now the guest jumped on the poarch and opened the paper door and come right through in.

Master so disinclined and the gust are equally out of the ordinary pipples. The company I obswerve by the sound went to the parlar and opened and shut the paper screen for several times and them approached over toward the studie.

"Say, there, no foolishing, what are you doing? There are the guest."

"Was that you?"

"Well, was that you? Why didn't you remark something if you was there? The house are almost like a wacant lot."

"Yes, this are my house, and I had something in my mind to contemperate about."

"Howevermuch you was in deep meditation, you could have roared at least a gentle come in."

"Certainly it are not beyond the impossible to say that much."

"You got pluck enough to mention that."

"Yes, I have been seeking to elewate my mentarity for quite some time."

THE MASTER CLASSIFIED.

"You are such whimsicall sillyass. If because your concern for you metal elewation you remark you can't answer to the guests, then I should say as how guests must have the suffering. Suffering cat, if you so settled right down. I didn't arrive here all alone. I accompanied a rare guest. Come out and greet the guest."

"Who did you brung along?"

"Don't worry who it are. Only emerge out and see. He so arnesly wish to envision you."

Master stood folding up and unfolding his arm in his bosom and remark, "Ho, ho, you just want to fool me I'm on to you."

But seemingly unconsciously he passed into parlar by way of poarch and there he limned an old man reverently sitting right in front of and before an alcove. Master unconsciously withdrew his hands out of his bosom and squatted down by paper screen. This make both of them facing toward west and so they can't exchange greeting.

MORE THIS INTERVIEW SATERDY.